
トランスファー 【 transfer 】

北川 圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トランスファー 【 t r a n s f e r 】

【Nコード】

N9401P

【作者名】

北川 圭

【あらすじ】

サクランボマークの宅配便、チェリー運送はどんなものでも運びます。

お客様のご要望にできるだけ応えられるよう、努力いたします。しがないバイトの青年が向かった先には、東南アジア系の美女。彼が運ぶものとは一体…。久々の北川流アクション系ライトノベルです。

青年の素性が徐々に明らかに。

#1 (前書き)

当然ながら^^^この作品は全てフィクションであり、
実在の人物・事件等とは一切関係ありません。

また、作中の法律や業務内容については実際と異なる場合があります。

1

プロローグ

どんなお荷物でも、心を込めてお運びいたします。

サクランボマークの宅配便：チエリー運送。

ええ、例えそれがどんなものであろうとも。

1

「タテイシさんがオットさんになってくれる。アタシうれしい。この国でまだ働けるね。え？モニカは働かなくていい？そんなこと言わないで！タテイシさんの役に立ちたい。…ありがとう」

携帯での甘いやり取りはとうぶん終わりそうもなかった。彼は今回の雇い主であるモニカ嬢へ一度だけ視線を向け、仕方なく自分の心配で作業を進めていた。

引っ越しは時間との闘い。ましてや今回もまた訳ありと来れば、な。

とは言え、東南アジア系の美女の荷物はそうある訳ではない。家電製品や大型家具は部屋備え付けであったし、当人の家財道具はそのほとんどが服や装飾品で占められていたのだから。ブランド物のバッグやドレスといったかさばる品を処分することもこちらへ任されていたから、傷をつけぬように丁寧に扱い何度も五階と道路へ停めた営業車とを往復する。

後は精算のみ、という段階になっても…電話は終わらなかった。

長電話はアシがつきやすい。まあそれも想定内か、相手にとっては一介の業者に過ぎない彼には無関係なことで、このセリフは飲み込んだまま依頼主へと向かう。

彼の視線をさすがに感じたのか、モニカ嬢は一瞥して声をひそめた。

「物音？別のオトコなんか引っぱり込んでないよ。アタシ信じてもらえない？ああ、そうね。確かに若いオトコいるけど」

ふふつと小さく立てる笑い声に艶っぽさが混じる。そんなものはどうでもいいから、早くしてくれ。

「なあにタテイシさん、少しは妬いてくれるんだ。モニカうれしい。引越しの人、若いお兄さんが一人。ダイジョブダイジョブ、モニカそんなに軽い女じゃないからね。じゃね、あとで」

チュツと派手にエアキスの音を立てると、ようやく彼女は通話を切った。作業服姿の彼に向かい合うと、下からのぞき込むように微笑む。

「……。じゃあこれで、作業終了です。ブランドバッグの換金の件ですけど……」

言いかけた彼の言葉をさえぎるように、モニカは手を伸ばした。

「お兄さん、ちょっとカッコいい。バッグはどうせ貰い物だし、全部お兄さんあげるから」

そう言いながらも、彼女の指は無意識であるかのように彼の鍛え上

げた腕を、作業着越しにまさぐる。

「今回は特別引越しサービスご利用ですので、前金で頂いた十万
んじゃそこから引取料と換金分を相殺させてもらいますが、いいっ
すか」

「ソウサイって何？」

モニカ嬢の声は少しずつ湿り気を帯びる。相反するように彼の態度
はどんどん醒めていく。

「その分、返金…えっとお客様からもらった金、返しますって言っ
てるんですけど」

「サトウさん、やさしいね」

モニカ嬢の目は、彼の身分証代わりの名札に注がれている。こっち
もプロだがさすがは接客嬢だねえ、サトウと呼ばれた彼は苦笑う。

「ただし、あのバッグはバッタモンばっかつすよ？唯一…金になり
そうなのがエルメスのバーキン。まあ型は古いつすが人気はありま
すからね。あれだけは並行輸入でもない、正規の代理店通したヤツ
でしょ」

「サトウさん、引越し屋さんのくせに査定できるの？みんなあれ
本物だよ！？」

片言の日本語を操るわりには『査定』なんて言葉がさらりと出てき
やがる。ったく女ってヤツはよ。

苦笑いというよりも彼の口元が歪む。したたかで強くでもなきや異

国で身体は張れねえよなあ。

「一応、業界独自の資格ですが鑑定士免許は取りましたよ。あんま、意味無いっすけどね」

度の入っていない太いセルフレームのメガネ越しに見下げてやると、彼女はやや悔しげに唇を噛んだ。

それでも指先は彼に触れたまま。表情をわずかに変えたモニカ嬢がそつとささやく。

「じゃあ、あと何でソウサイできる？アタシがキスしたら前金ゼンブ返ってくるとか。それ以上でもイイヨ」

しどけなさを含ませた声色。悪いがこつちも聞き飽きている。彼はキャップ越しに頭をかくと、カーテンの隙間を見やった。

「すみません、仕事なんので。それよか…早いとこ出た方がいいんじゃないっすか？さつきからずっとそこの道路に停まっていますよ、ごつつくて白いベンツが」

ま、おれには関係ないっすけどね。そう言いつつ差額分の紙幣と領収証を取り出そうとした彼に、モニカ嬢は突然すがりついた。

「さつきからっていつよ！？何で教えてくれなかった!？」

いやだから、おれには関係ないし。お客さんずっと電話してたし…。彼の言い訳など聞こえぬように、モニカ嬢は形相を変えて食ってかかってきた。

「アンタもグルね！？店とナカマ！！アタシ騙して十万取ってまた売り飛ばそうってんでしょ！！」

先ほどまでの甘い雰囲気はどこへやら。極度の怒りが伝わってくるほど彼女から腕を掴まれた。どうってことはないけれど、ここで客をねじ伏せる訳にもいくまい。

はあ、とため息をつくときサトウと呼ばれた彼は腕をそっと避け、代わりに彼女の肩に手を置いた。

「いいですかお客さん、こっちはあなたから頼まれて引越し荷物を運ぶだけ。深夜特別料金が十万を前金で頂いた。ブランド物は処分していいと言われたから、差額をお客さんに渡してこっちは帰る。それでおれの仕事は終わりです。そうですね？おれ何か間違ったこと言ってますか？」

だいたい、急ぐからって言ったたのお客さんの方ですよね。長電話までおれのせいにされたらたまったもんじゃない。

この繰り言も軽くスルーされた。モニカの顔つきがまた変わる。

「じゃあ、ホントに店と関係ないのね！？助けてよ！！だったらアタシも荷物と一緒に、運んで！！」

複雑な思いを全て飲み込んで、我慢強くサトウは黙って彼女の言葉を聞いていた。ほうっと一息ついてから事務的に告げる。

「お客さんを送り届けるとなると別料金になります…」

「いくらでもいいから！！あいつらに見つかからないようにしてよ！！」

それはまた、特別プラン料金で高くつきますがいいですか？淡々と
言い返したサトウは、モニカから激しい目つきで睨まれた。

「まったくしょうがねえなあ。」

ぼやきさえも火に油を注ぎかねない。「じゃあこちらからタテイシ
様の方に請求させてもらいますんで」とさりりと付け加えると、彼
はおもむろに商売道具のガムテープを取り出した。

深夜だというのにマンションの廊下へ荒々しい足音が響く。ヘビだ
かワニだか知らないが、高そうな革靴はこつこつと言うよりドタド
タという少々品のない音を立てていた。

腕っ節だけではなく根性まで据わっていそうな屈強な男が五人、真
っ直ぐに一つの部屋を目指して向かう。三つほど手前にいた作業着
の青年は、あやうく突き飛ばされそうになった。

ドアフォンを押すヤツと直接扉をどんどん叩くヤツ、それだけでは
なく大声でモニカ嬢の名を叫ぶヤツ。

「…だったら最初から、名前だけ呼べよ…」

青年は自分に浮かんだそんな思いをおくびにも出さずに、伝票を取
り出して何かを書き付けている。

「モニカ！モニカでめえ、そこにいるのはわかってるんだぞ！？
ドアぶち破られてえのか！！」

一番偉そうな一人が顎をしゃくる。合い鍵あるなら騒ぐなってんだ
よ、青年の声なき声はあくまでも胸の内。

手下と思われる若い衆が無駄に大きな音を立てて鍵を開け、中に土
足で踏み込む。

「服も荷物もすっからかんです！！あのアマもいません！！」

いや、さっきまで電話してたはずだ。この部屋から出ているはずが
ねえ。低く地を這うようなうなり声に手下ですら怯えているようだ
った。

青年は作業の手を休めない。視線がこちらを向いたことには気づい
ていたが、それでも平静さを保っていた。

睨め付けるような目で様子を伺っていたお偉いさんが、たまりかね
たように青年へと声を掛ける。

「おい、その兄ちゃん。こんな真夜中に宅配便かい？」

「あ、どうもお疲れ様です。うちも今度、深夜特別サービスっての
を始めまして」

愛想なく頭を下げ、さらりとかわそうとする。足元の荷物を軽々と
持ち上げつつ。

「…へえ、最近の宅配ってのはすげえなあ。その箱の中身、見せて

くれねえか」

いやあそれはちょっと。会社の信用問題になるんで…。

「何が入ってるかくれえ教えろや、兄ちゃんよ」

その辺のちんぴらでさえビビりそうなドスの利いた声に、あー布団つすよ、と軽く応える。

「深夜便なんか頼んどきながら、山田さん留守なんだもんなあ。営業所持って帰んなきゃなんないんすよねえ。ほら今、コンビニで二十四時間受け取りできるから、こっちも対抗するんだって言われて」

肩にその一メートル四方程度の箱をひよいと載せ、青年はエレベーターもないマンションの階段を降りてゆく。

背中にべつとりと苦々しげな視線を張り付かせたままで。

路駐の営業車に向かい、時おり肩の荷物を少しだけずらしながら青年は歩く。表情は変わらない。イヤむしろ、何を考えているのかもわからないほどの特徴なき顔。
しかしよく見れば、じんわりと滲む汗でセルフフレームがずれ始めているのがわかる。ようやく車まで来ると、彼は荷物をわざと乱暴に道路へと放った。

後ろのドアを開け、先ほどの箱をずいっと奥へ押し込める。赤いらインにサクランボのマークが深夜の街灯の灯を受けて目につく。

ややふてくされたようなふうで首を軽く回すと、彼は運転席に乗り込んだ。

ゆっくりと車を走らせ大通りへと出る。そこで初めて彼は右手で肩を揉んだ。

「ふつぎけやがつて、あの女。スタイルいいかと思えば全身筋肉かよ！重てえのなんの！！」

ようやく車内で一人になれたという安堵感からか、彼は吐き捨てるように大声を出した。

その運転席の真後ろにある、荷物室からの仕切り格子から呻くような声……。

「…重くて悪かったネ…」

「お客さん、勝手に出てきちゃったんすか…？」

振り向くのも怖い。先ほどの男どもとは違う圧力を後頭部に感じる。

「フザケルナはこっちのセリフね！！痛いじゃない！ドスンだのバタンの置かれて、最後なんかケツたでしょ！！足で！！」

「しゃあないでしょうが。お客さんはあくまでも通販で届けられた布団なんだから」

深夜ゆえの空いている都内の道路を、サクランボマークの宅配トラックは飛ぶように走り抜けていく。

「これでタテイシさんのところに連れて行ってくれるね」

「まあ、最大限の努力はしますけどね」

サトウと呼ばれた青年は、横目でサイドミラーを確認する。そんなに甘いはずがないのは最初から覚悟していたさ。目視できたのは、磨かれた車体を光らせつつピタリとついてくる……白いベンツ。

「さあてと、振り切るには荷物が重いと。街のど真ん中でやるのもなあ」

モニカの携帯は取り上げてある。タテイシがどんな輩か確認できない限り、連絡なんぞ取られてはたまったものではない。

…まあ、いつときでも夢でも見てるや…

わずかな格子窓から前方をうつとりと眺めるモニカ嬢の胸中はいかなものか。それを慮る余裕は、どうやらサトウ青年には与えられようもなさそうだった。

はあ。これで何度目かのため息をつきながら彼は頭をかいた。

(つづく)

北川 圭
Copyright? 2009 - 2011
kaitagawa All Rights Reserved
k
e
i
k

2

2

宅配トラックは高層マンションやビル群を抜け、都心から下町方面へ。とは言え、周りの景色は灰色のまま。

人の住む気配は消えてゆき、巨大な倉庫ばかりが見えてくる。

貨物船の埠頭付近には、緑豊かな公園や遊歩道さえ整備されているというのに……もの哀しく思えるのはなぜなのだろう。異国を感じさせるからなんだろうか。

最近の若者らしい風貌には似合わない感傷を持ちつつ、青年はゆっくりとコンクリート製の埠頭ギリギリに車を停めた。少し離れて、例のベンツも静かにブレーキを掛ける。高級車らしく音もしない。

青年は自然さを装ってドアを開けると、わざとらしく伸びをした。

「兄ちゃん、配達はどうした？こんなところでサボって何を待ってるんだ、え？」

偉そうな男は、おそらくは組幹部。ミラーへちらつと映る、車と同じ白色のスーツが夜目に光る。

「……やってらんないっすよねえ。ノルマはきついし時間は厳しいし。ときどき自主的に休憩でも取らなきゃ過労死ですよ、過労死」

青年は大きく首を回しながら海を見つめるばかり、後ろを振り返るうとはしない。

「過労死の前に、兄ちゃんよお。このだだっ広い東京湾に沈めてやってもいいんだぜ」

陰惨さを含む声に、ようやく青年は半身を男どもに向けた。何も考えてなさそうな無表情、そここの状況であってさえも。

「ビビりもしねえってことは、覚悟の上か。てめえもシロウトじゃねえな？どこの組だか言えや。それによっちゃあ、こっちの出方も考えさせてもらうんでね」

組？とぼけた声でのんびりといらえを返す。うちはこれでも株式会社すけど、と。

「チエリー運送ねえ。残念だったなサトウさんよ。あんたの配達先には山田さんじゃなくて、アイリーンが客を取ってたんだがな」

ちっ。微かな舌打ちは聞こえたかどうか。もとよりこいつらをまく気はさらさら無かったがね。むしろいぶり出す為の……。

「組じゃねえつつうんだったら、逃がし屋か。目障りでしょうもねえ連中だが、あんたにはまだ荷が重いんじゃないかねえの？」

引越し屋だけにな。笑えぬ冗談に下っ端は愛想笑いを派手に立てる。

「逃がし屋？何すかそれ。こっちは善良なしない宅配便のバイトすよ」

青年はあくまでも呑気に答える。時間でも稼いでいるように思えたのか、幹部らしき男の目がぎろりと光る。

「高い金ぶんどってオンナの足抜けを手伝う輩だよ。まあ、相手が不法入国の風俗嬢とは限らねえらしいがな。極悪な犯罪者だろうがテロでも何でも、金さえ積みめば逃がすってね。仁義も筋も通りやしねえよ、若いヤツらはよ！」

自身は組という組織で根性を鍛えられたとでも言い張りたいのか。思わずもらした青年の失笑に表情が険しくなる。

「こちらとしても、高いリスク被って莫大な投資をつぎ込んでオンナ使ってたんだ。てめえみてえな、はした金に目がくらんで人情を踏みじめるヤツはそれなりの制裁を受けてもらわねえとな」

「人情って、言ってること無茶苦茶すよ？結局カネを回収したいだけっしょ？投資に見合うだけの」

んだとてめえ！！血の気の多い若い衆らが刃物を抜く。遠くのライトがわずかにその刃にきらめく。

それに腕を伸ばして行動を制すると、幹部は低く脅しを掛けてきた。「サトウ」青年へと。

「逃がし屋だと認めるんだな、サトウさんよ。まだ若いみてえだし、物事の道理もこの世界のしきたりもわかってるようには見えねえ。」

一回だけチャンスやる。今ここでモニカを黙って引き渡せば、命だけは助けてやる。これきりこちら側には近寄らねえ方があんたの身の為だ、サトウさん」

「モニカって誰っすか？」

言いながら彼は、先ほどの車中を思い返していた。

幹線道路を抜けて港へと向かっているらしい気配を察したのか、モニカ嬢はそれはそれはかまびすしい声を張り上げていたのだ。

…そんなところは、よく気づくよねえ…

青年の苦笑いは、振り下ろされたゴルフクラブの柄で止められた。

「いてっ！！危ないじゃないっすか！！それに勝手に他の人の荷物開けないでくださいよ。会社の信用に関わるっつってんじゃん」

「どこ連れて行くネ！？ここ道路と違う！！ミナト！！船乗せる気！？？」

細い格子の隙間からクラブを振り回す彼女の声には、悲愴感さえまわりついていた。危険はすぐに察知する、それが生き抜く為の生活の知恵。だったらさっきとっと逃げてればよかったのによ…タテシさんのところでも。

青年は柄をぐいと押さえると、後ろ手で格子窓の鍵を開けた。手を取られて前のめりになるモニカの頭を持ち、危ないんで黙っててください、と引き寄せた。

「…サトウさん」

目だけは前方とサイドミラーをせわしなく見続け、彼女の唇に自分のそれを押し当てる。はあ、というモニカの吐息を聞きながら…左手で器用に彼女の両手首を合わせて背中に固定していった。ツールはもちろん、商売道具のガムテープだ。

「ちょっとアンタなにす!？」

再び騒ぎ立てる彼女の口には、まず取り敢えず伝票のシート。粘着力は意外とある。耐水性はないけどな。まあこれで、しばらくは黙っててくれや。

念のために果物梱包用のネットを頭からかぶせ後ろに倒すと、もう一度青年は格子窓の鍵を掛けた。

今さら、モニカって誰だと言ったことがばれた日には、後であの女から何をされるかわかったもんじゃない。

…そっちの方がよっぽど怖え…

思い出しの苦笑いに、腹に据えかねたかのような組連中が表情を変

える。

「てめえが荷台に匿ってるオンナだよ！！さっさと出しやがれ！！」

「ここには営業所持ち帰りの布団と、朝一配達の荷物しか載っけてませんけど？おれ今夜、このまま走りっぱなしなんすけど、もう行っていいっすか？」

行っていいか訊かれて素直に帰してもらえとは、いかなサトウ青年でも思っちゃいなかった。

その、人を食ったような返事を合図と見たのか、刃物を構えた若い衆が彼に向かって走り寄ってくる。

「そつちからやってきたってことは、おれが抵抗するのは当然の正当防衛っすよねえ」

最近運動してねえからなあとぼやきつつ、彼は一人目の手首を瞬時に掴むとぐいと捻りあげた。

反撃を喰らうとは思っても見なかった男は、焦ってそのいましめから逃れようとするが青年の手力は意外と強い。

もう一人、横側から来た別の男に、左脚を伸ばしてそのまま顔に蹴りを入れる。

…道場やら試合やらでやったら、即退場だねえ…

青年は心にもないことを一瞬思い浮かべ、ちらりと視線をそちらに向けた。

めり込む靴先に、血が飛び散る。一度力を抜いて膝を緩めると、男の体重がそこへと掛かる。受けたダメージの大きさが感じられる。今度はかかとから蹴り飛ばす。横側の男はあっけなくコンクリートの地面へとそっくり返った。

どさりという音に周りが浮き足立つ。さっきから手首を押さえられている方の男は、額に脂汗を浮かべ始めた。ぎり、ぎりという鈍い音が響く。声にならない悲鳴を上げてヤツは膝から崩れ落ちる。青年がそいつの両手首をねじったせいだ。骨が腱か。まあしばらくは使い物にはなるまい。

下っ端はあと二人。律儀なのかのちのち面倒なのか、拳銃を出されないのは幸いだ。

何しろこっちは丸腰、やってらんねえなあ。心の中でぼやきながら青年は上着を脱いだ。チェリー運送のサ克蘭ボマークが縫いつけられた作業着。その下は半袖のTシャツ。にじんだ汗は今の闘いでというよりも、意外と重めのモ二力嬢を運んだときのもの。

鍛えられた胸筋がありありとわかる。彼は両手で作業着を持つと、わずかに足を前後にずらして開いた。

「兄ちゃんよ、腕っ節には自信があるようだな。そのチンケなプライドが命取りだったってこと、教えてやるよ」

幹部の低い声。言葉こそ取り立ててきつくはないが、含まれた怒りが周りを震え上がらせる…のだろう。

残念ながら青年には堪えていなかったようだ。

「別に自信なんか無いっすよ。まあ標準かなあ。もうちよつと入会時のレヴェル上げといた方が、そちら様の組織の為じゃないっすか？」

息も乱さずにさらりと言われ、完全に頭に血の上った若い衆らはおおっと叫び声を上げて青年に向かっていった。

まるで又ンチャクか鞭のように作業着をしならせると、一人の男の目にバシリと当てる。あまりの痛みにヤツが両眼を押さえて地面を転がる。あーあ、こっちがこれ持ってんだから少しは警戒しろよ。呆れて見下げる青年の視界に、もう一人は入っていない。

いけると踏んだのか、ヤツは刃物を振り下ろそうとした。そこへ持ち直した作業着で刃物だけをはたき落とす。

はつとした男の顔面に一発の突き、歩を踏み出しての腹へもう一つ。思わずうずくまりかけたヤツの腰を横抱き気味にクラッチすると、自分は倒れこまずにそのまま相手だけを地面に叩きつけた。

受け身を取る暇もなく、男は既に立ち上がることさえできないで呻いている。

そこまですると作業着をはたき、もう一度上から着込んで右手を自分の肩において揉みながら首を回す。

配達の仕事を終えただけでも言いたげな青年のひょうひょうとし

た表情に、幹部は目を見開いた。

「てめえ、何もんだ！？名前ぐらい言え！！」

「名前言ったら、どうするんすか？スカウトでもしてくれんとか」

にやけた笑いを浮かべ、彼は幹部へと近寄ってゆく。肝っ玉は据わっているらしいから、考えてやってもいい。偉そうなセリフの声はわずかに震えている。

「悪いっすけど、おれこの仕事気に入ってるんすよねえ」

「…逃がし屋が、か！？」

まさか、宅配便のお兄ちゃんってバイトがですよ。口ではそう言いながら、腹の中では罵倒の嵐。

…バカかこいつ。そうそう簡単に身バレするようなことしゃべると思ってるのかねえ…

マジンガーだってデビルだって、何があっても正体は明かさねえつてのに。特撮ヲタからの余分な情報を思い出し、にやけた顔はくすくす笑いへと変わってゆく。

「こんなことして、てめえに何の利益があるってんだ！？モニカか？あの女は青二才の手にや負えねえタマだぞ？どうせてめえはモニカにご執着のタテイシからの依頼だろうが、あれだって別の組のスカウトマンだ。はした金でご苦労さんだろうし、てめえはこっちの組からずっと追われる羽目になるんだぞ！？」

「そのセリフ、モニカって人に訊かせてみたいもんですね。会ったことないっすけど」

なんだ…と…。歯を食いしばって怒りを抑える幹部の顔を、挑発するようにのぞき込む。

たまりかねてヤツが拳銃を取り出して青年に向ける。彼は全く動じない。

「いいんすか？本職が善良な一市民を銃で撃つたりしたら、一生刑務所から出られませんか？」

「どこが一市民だ！！組の店のオンナを足抜けさせて、若いモン四人をのしやがって。今さらシロウトヅラしても遅せえんだよ！！」

そらそつだ。彼の言葉には一理ある。青年は可笑しさが止まらないという顔で聞いている。

「撃つなら撃ちますか？至近距離って案外当たらないって聞いたけど」

間合いを詰めてくる青年に、心理的な恐怖を感じているのだろうか。幹部ほどの男が銃口を震わせている。

「じゅん…のお…」

トリガーに指が掛かり始めるのを潮時と見たのか、青年は一度すつと身を沈めると右腕を振り上げる形で拳銃をはたき落とした。

怒りに震えた幹部が彼に襲いかかろうとしたそのとき。

一斉に赤色灯とサイレンの音が辺りを埋め尽くした。何が起こったのか、さすがの組幹部も怯えて周囲を見廻すばかり。

青年は急いで自社トラックに駆け寄ると、運転席に乗り込んだ。

エンジンを吹かし、いきなり急加速でバックすると、タイヤを鳴らして方向を変える。

「うわっ！！」

嫌がらせのように、いや多分に本気で嫌がらせに幹部の方へと車を一度突っ込ませると、ハンドルを切って埠頭から走り去ろうとする。クセのように見やるサイドミラーには、警視庁のパトカーが倒れた男どもと立ちつくす幹部を取り囲んでいる。

「大変だねえ、いろいろと。これからお疲れさんだわ、ありゃ」

応援のパトカーが数台、チェリー運送のトラックを追いかける。が、青年の選んだ道はトラックの通れるギリギリの狭い遊歩道。案外と横幅のある警察車輛は、一瞬ためらったかのように見えた。

そのまま、埠頭からの道筋をショートカットして大通りへと戻る。

メロンみたいなネットこそ取れたが、まだ何も話せないはずのモニカ嬢はうーうー唸りながら抗議の音を立てている。格子窓に何度も

体当たりをかます振動がけっこう背中に来る。

「本職の方々がずっと扱いやすいわ、こりゃ。この女、マジめんどくせえ」

フルフェイスのメットでも被しときゃよかった。というへんな方向の後悔を残して、青年は首をグルグル回しながら都内へとまた走り続けた。

どこへ向かうのかは、彼にしかわからぬままに。

(つづく)

北川 圭 Copyrigh t? 2009 - 2011 keik
i t a g a w a A l l R i g h t s R e s e r v e d

#3 (前書き)

くどいようですが、实在の団体組織とは一切関係ありません。
名称等は北川独自の創作によるものです。実際にはありませんって
ば。

…チキンなもので、念のため。

3

3

空が白々と明け始める。

早くも始発電車が動き始めようとしているそのとき、サクランボマ
ークをつけた宅配車はレインボーブリッジを抜けてさらに海側へと
進路を取った。

モニカも既に声もなく、荷台室の壁にもたれたまま。暴れたせいで
汗をかいたのか、とうの前に口に貼り付けられた伝票などはがれて
しまったというのに。

見慣れたサイドミラーに、うつすらと照明の名残を見せる橋が映る。
その上を走っているときには全体は見えないのにな…ほうつという
青年の吐く息がわずかに辺りを曇らせる。

「…カワサキには、行かないネ」

タテイシさんが待つという川崎駅前。おそらくそこにはそいつだけ
ではない輩どもが、モニカを待ち受けているだろう。彼女は手荒に
扱われることもない代わりに、欲しかった日本人の妻の座もおそら
くはもらえはしまい。大事な金づるだから。

そのまま黙って再び倉庫街へと向かう。あるコンビニの前で青年は
車を停めた。

運転席との仕切りを開け、彼女の手の縛めをとく。憔悴しきったモ
ニカの瞳が彼を捉える。

「JJJ…」

「行きつけの場所、でしょ？おれはここまで送った。降りてからのあんたに関心なんか無い。選ぶのはあんただし。好きなところに行けばいい。返金がまだだったつすよね。それでタクシーをつかまえば川崎駅まで行けるつすよ、タテイシさんの待つ」

モニカはしばらく、自由になった両手で自分の顔を覆った。涙を流すふうではないが、こみ上げる何かがそうさせているのだろう。

「サトウさんにはわからない。あたしが稼ぐ、故郷くにに送金する。それで一家七人がようやく暮らせる。弟も妹も学校に通えるし、父は病院にも行ける。あたしはまだ、帰れない」

途切れ途切れの、モニカの呟き。このセリフも、言っちゃ悪いが聞き飽きている。それでも真剣なまなざしで青年は振り返った。

「じゃあ、そのあんたが死んじまったら…誰が家族に送金するんすか。あんたに掛けられた保険金は組がそのまま吸い上げる。待ちわびるあんたの家族には一銭もわたらない。このままの生活を続けて、こんな綱渡りを繰り返したら、確実に消されますよ。そうでなくても、商品価値が下がれば捨てられる。そこから地道に働こうと思いき直したところで、不法滞在のあんたに何の援助も保護ももらえない。それでもいいんすか」

モニカは強く唇を噛む。夜に護られていたエキゾチックで妖艶な美女は、容赦ない朝の光の下で素肌を晒す。

そこにいるのは、生活に疲れ果てた……ただの女。

「故郷に帰ったら」

「家族と一緒に暮らせませよ。命を張る、緊張しきった毎日から解放される」

「ハタラクところなんかない」

日本での暮らしを思えば、どこでも生きていける。青年の言葉は誰に向かって言ったのか。

しばらく躊躇していたモニカは、離さずにいた自分のバッグをたぐり寄せると中から一枚の写真を取り出した。

「これ、娘ね」

ふっとこぼれる彼女の笑顔。そこには今までにない柔らかさがあった。

げっ、子持ちかよ……。青年の脳裏へとつさに浮かんだ言葉は必死に押し込められ、へえかわいいうすね、というぎこちない返答へと変換さえれた。

彼は集金バッグからいくばくかの札が入った封筒をつかむと、彼女へと渡す。

「すみません、こういう状況なんで明細書出せませんが。自費出国のチケット代の足しにでもしてください。強制送還使うより、出国命令で自分のカネでさっさと帰った方が時間も掛からない。ヤツらがどういう手を使ってくるか、見当もつきませんからね」

これ…。震える手で封筒を受け取るモニカに、ブランドバッグの買い取り分つすから、と笑う。自腹切れるほどこっちも時給高くないんで、と。

沈黙の時間が過ぎる。モニカのきつくつむられた目から、涙が流れ出す。

バックミラーで見るも無しに見ていた青年は、やはり一言も口を開かなかった。

やがて、涙を手でさっと拭き取った彼女は、バッグから化粧道具を取り出すと手早く崩れたそれを直しに掛かった。手慣れたもんだねえ、ヘンなところで感心をする。

何か吹っ切れたように顔を上げたモニカは、仕切りをまたぐと助手席へ座った。青年の顔を手で押さえると自分に向けさせる。化粧品に残り香が辺りにただよう。

そこには疲れ切った女ではなく、意志の強い美女が微笑んでいた。彼もモニカをじっと見返す。

「サトウさん、ウソの名前ネ。本当は？」

ちよっとしたためらいのあと、彼は呟く。

「大輔」

ファーストネームだけ？いたずらめいて笑う彼女に、それでカンベンしてくださいよ、と大輔も苦笑いで返す。

「ありがとう、ダイスケ。あなたのおかげ」

モニカは大輔の顔を引き寄せると、今度は自分から唇を押し当てた。優しく彼の上唇を噛むように、それからそつと舌先で触れる。

されるがままの彼は、薄目でそれを見やるだけ。何の反応もせず動かずにいた。抱き寄せてやれるほどの甘さもないし義理もない。

単純に彼女の好意を有り難いと思えぬほどには、世の中を知りすぎていたから。

潤んだ瞳のまま唇を離れたモニカは、バッグ一つで車のドアを開け、ゆっくりと歩いていった。

コンビニの真向かいは、朝日を受けて碧く光る入国管理事務局の高いビル。

調査第三班へそのまま自主出頭すれば、今まで犯してきた数々の法令違反をばっくれていれば、モニカでさえ黙って自国へと帰れるだろう。

彼女の姿が建物に吸い込まれるのを見てとると、大輔は念のため、辺りをぐるりと見回した。追っ手はいない。まあ、追っ手を送りつけること自体ムリだとは思っけどね。

右手の甲で自分の唇をぬぐう。べっとりつく赤い色素に、あきらめてその辺のタオルを探す。何度もこすってようやくそれを取ると、クセなのかまた首をぐるりと回した。

「ありやまたやるな、フホニユー。名前もパスポートも変えて、こ

苦労さんだわ。こんなんで懲りるタマじゃねえだろうしなあ」

ぼそりと呟くと、大輔は再び車を走らせた。

彼の運転する営業車は、ある建物の地下駐車場へと吸い込まれてゆく。肩を回しながら降りると、受付の係員に声を掛ける。

「お疲れ様です！」

「おはようございます」

笑顔一つくらい見せろつつうんだよ、愛想ねえんだから。ここに来るといづくいつもの感情。受付にいる無表情の男に、心の中だけで思い切り八つ当たり。こっちだって疲れてんだよ。少しはねぎらえよ、ったく。

温かな反応をあきらめた大輔がそのまま社員証を機械にかざすと、認証が済んだピツという合成音がかすかに響く。そのまま彼は、煌々と灯りのついたままの廊下を進んでいった。

警視庁組織犯罪対策室。

早朝というのに、そこには既に人の気配。ただ、一般的なイメージ

の警察署と違うのは怒声もけたたましい電話の呼び出し音もないこと、か。

ドアの入り口でもう一度社員証をかざすと、大輔はノックしてから勢いよく扉を開けた。習性で帽子を取り、お疲れ様っす！と頭を下げる。

部屋にただ一人いた男は……無言のまま。

はあ、とこれ見よがしに大げさなため息をつき、大輔はグチグチと文句を言い始めた。

「あーやだやだ！これだからお役所仕事は、つつわれるんっすよ。可愛い部下が生命の危険も顧みず職務をこなして帰ってきたのに、お疲れさんの一言も言えない上司なんかのもとで労働の意欲が湧くとても……」

ぶつくさ言い続ける大輔を一瞥すると、男は再びPCのモニター画面に視線を戻す。

「これだけ言っても反応無し！老化で耳が遠くなっただんすか！？チーフ！室長！堂本警視！？補聴器でもプレゼントしましょうか？還暦のお祝いで……」

大声でがなり立てられた警視の堂本は、左手で額を押さえると「……お疲れさん」と吐き捨てた。

「はい！？聞こえませんが何か！？」

「……調子に乗るのもいい加減にしろ。いいからさっさと報告したまえ」

だいたい還暦だ何だと、私はそんな歳ではない。堂本の呟きを聞き逃すような大輔なはずもなく「反応するところはそこなんだ」と嫌みっちらしく言い返す。

「人の上に立とうつてヒトは、そういう心配りこそ大事なんじゃないんですか？部下から言われなきゃねぎらいも言えないような…」

「報告をしろ」

冷やかに切り捨てられる。隙のないスーツ姿に銀縁のメガネ、歳は還暦どころか四十前だろう。泥だらけの作業着をだらつと羽織っただけの大輔とは真逆。

商売道具のマーク入りキャップをかぶり直した大輔は、今度は念のために掛けていた太いセルフレームを外した。

茶系の髪を無造作にはねさせ、いつも人を食ったようなシニカルな笑みを浮かべている。ひょうひょうと言う言葉が大輔には一番似合うだろう。そう、目の前の堂本にはないもの。

これだけ印象の違う二人に、ただ一つ共通しているのは…。

「モニカ・ブエナを保護、そのうち入国管理事務局に送り届けました。以上！」

むすつと言い返した大輔に、堂本が今度は身体ごと向き直る。

「手続きを取ったところまでは確認していないのか。おまえは詰めが甘いと、常日頃から注意しているだろうが」

「…どうせそつちでチェックしてんでしょ？ だいたい、彼女が日本中を逃げ回ろうと自国へ帰ろうと、おれには関係ねえし」

「やったことはそれだけではないはずだ。また派手に暴れたそうだな、さっそく所轄からクレームが来ている」

そんな、それを穩便に処理するのがあんたの仕事でしょうが。聞こえるか聞こえないかギリギリの大きさでぼそりと言ってみる。堂本の目がぎろりと向けられる。

「暴れたって…どうせチーフの思惑通りに踊らされてんのはこつちでしょ。やってらんねえ」

モニカ嬢の足抜けの事実を元に、店と組へ一斉に踏み込んだと。おれはきっかけつつつか、言い訳つつつか、結局ダシに使われただけだし。

「で、全部とつつかまえたんすか？」

「そもそもあの店は、白勢会というよりも幹部の児玉が勝手にやっていたことらしい。儲けがいいんで上部も黙認、という形でな。裏から上納させていたのだろうが、こういうことが起きればトカゲの尻尾切りだ。まあ、その為に会公認をわざと避けていたのだろうがね」

幹部の児玉ねえ。あの白スーツのおっちゃんか、気の毒に。見えぬように大輔が浮かべる苦笑。

「こんなモグラ叩きみたいに不法滞在と人身売買ちまちまと摘発して、効果ってあるんすか？おれ一人ババ引いてるとしか思えねーし。だいたい最近、仕事がハードっすよ！！やたら身体張る物件ばっかで。危険手当とか出ねえのかなあ」

たまりかねて堂本がため息をつく。ここにいるのは彼一人、他の職員は出勤すらしていない時間帯ではあるので仕方はないが。

「この仕事で身体を張らずにやれるものがあると思うのか。寝言は寝て言え」

あまりに冷静に返され、思わず大輔は大声を出した。

「保障完備・生活安泰・安全完璧デスクワークの警視庁キャリア国家公務員に言われたかないっすよね！！おれらみたいな細々とした時給いくらでかつかつに暮らしてる日雇い労働者はっすね！？」

「だったら」

堂本から感情が消えた。真っ直ぐに射るような視線を大輔に向ける。彼の方は何かに怯え口をつぐむ。

「元の職へ戻つたらどうだ、久住^{くずみ}。空挺へ」

大輔もまた、表情をなくす。

「空挺方面のトップからは何度も要請が来ている。本人の希望があればいつでも空挺四班は受け入れる態勢はできている、とな。久住大輔を」

防衛隊空挺方面特科第四班は、空挺とは名ばかりの対テロ・ゲリラ等制圧特殊部隊。言うならば日本における非公式のグリーン・ベレ
I。

「おまえの望み通り、国家公務員で保障は厚いぞ。以前のように」

無駄口を叩くことさえできずにいる大輔に、堂本は敢えて無言を通そうと決めたようだった。しかし、言葉よりも意味を持つその視線に、大輔の方が耐えきれなかった。キャップ越しに頭をかくと、ドアに向かう。

ふう、と息を大きく吐いてから振り向く。平静さを取り戻せ、己に課す厳しいコマンド。

大輔はさつと表情を変えると、またも呑気な声を出した。

「あーあ、つくづく上司に恵まれねえなあ。やってらんねえ。危険手当なんか出せね、って言やあ済むことなんすけどねえ」

じゃ、おれはこれで。頭を下げる。

「久住」

思いを抑え込もうとしている大輔へ向かい、堂本は再び冷静な上司として言葉を掛けた。

「おまえの置かれている厳しい状況はこちらとしても把握している。来週には人員をつけるから、それまで我慢しろ」

「あー、来週つすか？宅配のバイトの方がシフトきついんですよー。この時期は人手が足なくて。なるべく、こっちの仕事入れないように調整してもらえます？んじゃ」

頭だけは習性で丁寧に下げたものの、ドアはかなり乱暴に閉めてやった。

ざけんな、使えねえメンツなんか要らねえよ。かえって邪魔だったんだ。これは声に出さずに胸にしまい込む。

今朝ばかりは、殺風景なはずの廊下に貼られた防衛隊員募集のポスターがイヤでも目につく。

「商売敵だろうが、警視庁にしてみればよ」

軽口を叩いてはみるものの、大輔の表情は険しかった。無言で、制服姿の男女と後ろに写る戦闘機を睨みつけ、おもむろにその紙を力任せに引き剥がす。床にそのまま投げ捨てると、彼はただ歩き続けた。

地下に停めておいた、見慣れたトラックのサクランボマークになぜか安堵の気持ちをいだく。

「散るがさだめの桜田門より、こちとら実のなるサクランボ、つとくらあ」

今度こそ本物の営業所に向かう為に車を発進させた大輔は、クセのように首をぐるりと回した。

()

北川 圭 Copyright? 2009 - 2011 keik
itagawa All Rights Reserved

4

4

「あざーす！」

営業所の朝は早い。特に数をこなすことで大手と張り合っているよ
うな、後発のチェリー運送などは。

大輔も七時には営業所へと向かい、大きく伸びをして首をぐるりと
回した。

宅配業務以外の引越などは、料金表には載せぬオプション。大
抵は訳あり物件なので、バイトの中でも手がけるメンバーは限られ
ている。

それ以外は至って平穩無事な日々が続く…はずだった。

「大ちゃん、おい大ちゃん」

机の端で、法人営業担当の清水が囁き声で大輔を手招きする。辺り
にちらつと視線を送ってから、わざと彼はのんびりと歩いていった。

「あざーす」

あくびまじりの挨拶には応えもせず、清水はいきなり手を合わせて
拝む仕草をする。

「悪い、大ちゃん。急な仕事なだけどさ」

「またつすか？清水さん。今朝はどこなんよ」

『オシボリ本舗』さんから泣きつかれちまってさ、清水の声はますます小さくなる。

「あそこの営業、たしか佐橋さんっしょ？ったくあの人って学習しないよね？何度もシフト組み間違えて、どうせ早番の回収が間に合わないとか何とかそんなの…」

そう、そうなのよ。清水はいくぶんホツとしたように表情を緩めた。

「本舗さんにはいろいろと、ね。ここで恩売っとしても悪くない話じゃない？」

もう釣りが来るほど売ってますが。こちらはこちらでむっとした顔の大輔が、で今朝は何軒つすか？と訊き返す。それに指を四本ほど示すと、楽勝でしょ？大ちゃんなら、と清水が笑う。

「今日は誰と組むのよ」

「さあ、シフト表まだ見てねえし。まあそっちは何とかしますよ、おれの方で」

要するに営業所、もっと言えばチェリー運送の会社自体を通さない仕事を持ちかけられているのだ。倫理的にと言うより法的にどうかとも思うが、こちらはこちらでしがらみも義理もある。少なくとも大輔にとっては。

清水はそっと、本来ならオシボリ本舗という貸しタオル業者が回収

すべき店のリストメモを、大輔の手に握らせた。まあ、四軒なら通常業務の前にさっさと回れるだろう。行き先がちょっと特別なので、清水だつて大輔くらいにしか頼みはしない。

素知らぬふうで受け取ってから彼が今日分の通常ノルマを確認しようとする、今度は営業所長に呼ばれた。

「おーい、大！！大ちゃん、ちょっとこっちこっち！」

いい男はモテるねえ、事務のおばちゃんの冷やかしに、三上さんがあと三十若かったときに言われたかつたねえ、と軽口を叩く。

「よく言うよ、こんの尻が青いガキんちよがさ！」

内勤のベテランパートらは、配送担当とは年期が違う。若いうちにしか到底やり切れそうもない体力仕事のバイトたちを、伝票一つでばっさばっさとさばいていくのが彼女たちの腕の見せ所だからだ。

「えー？おれでもまだガキ扱いなわけ？」

けらけらと笑い声を上げるパートのおばちゃんに、あたしらの相手になるにはまだまだ修行が足んないねえ、とさらにからかわれる。

まいったねえ、と頭をかきながら所長のところへと駆け足で向かう。あざーすの挨拶を言うか言わないうちに、大輔の袖を所長はぐいとつかんだ。

「な、なんすか？おれまだ今日は何も悪いことしてねえし」

「だいぶ目はつぶってやってんだけどな。今日は別件だよ。新しいバイトが入るんだけどさ」

頼む、とこれもまた手を合わせて大輔を拝む。今日は厄日かよ…どうせろくでもない用事に決まってる。ため息混じりの彼に、初日付き合ってやってくれや、とさらりと所長が口にする。

「おれが新規バイトの面倒っすかあ!？」

「今日さ、シフト空いてんの大ちゃんくらいなんだよねえ」

ちよつと今日は取り込んで…と言いかけた大輔に、所長は右の指で丸を作って左ポケット辺りへとそつとあててみせる。それから意味ありげに無器用なウィンクまで付け加えた。

…バツジ絡み、ってことか…

世の中にはいろんなバツジがあらあねえ。どっち方面か、所長も言いたかねえってことかよ。

大輔は、面倒くさそうに天を仰いだ。

「おはようございます!!! サクランボマークのチェリー運送です!!!
!!!ありがとうございます!!! おはようございます!!!……!!!」

毎朝繰り広げられる大声運動に、かつたるそうにそれでも一応は真面目に参加する。挨拶は接客業の基本、宅配ドライバーでもそれは同じ。

皆が集まった頃合いを見て、所長が一つ咳払いをした。

「えー、おはようございます。えー、今日もケガ無く事故無く元気よく！お客様へ真心をお届けしていきましょう！」

「はいっ！」

そこへ「へーい」という呑気な大輔の声が混じるのはご愛敬か。所長がやや呆れ顔でそちらを向く。

「えー、今日から新しくバイトに加わるアサダさんです！」

あさ：だ？大輔の感情が少しばかり揺れる。が、顔に出さないよう保とうと努力するポーカーフェイス。

所長に紹介されて全員の前に姿勢良く立ったのは、若い女性だった。

「アサダ美羽子みわこです！よろしくお願ひします！」

若い子は元気でいいねえ、パートのベテランたちはしっかりとした風の美羽子に好感を抱いたようだった。

髪を短くすき、染めているようには見えない清潔感あふれる様相と、きりっとした顔立ち。声の張りにも隙がない。今どきの、というよりはばりばりの体育会系か。背は低いが、その分、動きは敏捷そう
だ。

「アサダって、浅い深いの浅田？浅田美代子みたいだねえ」

一人のおばちゃんの声に、歳がばれないように浅田真央ちゃんくらい言いなさいよと笑い声がかぶさる。

「いえ、自分は朝日の朝に田んぼの田です」

朝田…美羽子。大輔の瞳が知らずに細められる。

「えー、とりあえず今日は久住さんと組んでもらうから」

今度は所長ではなく、その場の全員からエー！という声が上がった。

「なんなんすか！？その反応は。傷つくなあ、後輩指導には定評のある久住様をつかまえて！」

調子に乗ってぶんむくれてみせた大輔に、朝からヘンなところに引っぱり込むんじゃないよー！と余計に騒ぎが広がる。

「じゃ、ま、仕事終わったら二人で直帰ということぞ」

朝田さん、こちらへどうぞと手を取ってトラックへと案内する大輔に、他の連中は口々に冷やかしの言葉を浴びせた。

「同じバイトの久住っす。今日は一緒についてきてもらって、端末

の使い方と伝票処理の仕方と…ええと、朝田さんって今まで宅配やったことあるんすか？」

にこやかに美羽子へと問いかけた大輔は、彼女の冷やかな視線に言葉を切った。

「久住さんって笑うんですね。…というか、もう笑えるんですね」

「はあっ？何言ってるんのオタク」

トラックにはもう、今日配達予定の荷物が取り出し順に納められている。朝礼の前にささっと大輔が準備しておいたからだ。四軒の別口がある分、今日は手早く仕事を進めなければならない。

が、新しいバイトは若い女性。使えねえだろうから一人で頑張るか、と覚悟を決めていた矢先のことだけに、この突き放した冷たさが珍しく大輔を動揺させた。

黙ってドアを開け、運転席へと座る。少々高めの助手席に、美羽子は苦もなくささと滑り込んだ。

しばし無言。減らず口が信条の大輔にしたら珍しいことだ。いつもならたとえ初対面でも無遠慮に話しかけ、警戒心を解くくせに。バイトとは言え、宅配ドライバーの給料は歩合制の部分もあるから、いかに新規の客を取り込むかが勝負になる。

…カネの為にやってるんじゃないけど、な…

仕事に熱中していれば、余計なことなど考えずに済む。今という時を消費することが大輔にとっては何よりも大事なこと。

しばらく同じように黙り込んでいた美羽子は、前を向いたまま感情を込めずに口を開いた。

「警視からの伝言です。今夜二十一時に集合とのことですので」

「ケイシ？そんな名字の知り合いはいねえんだけど」

朝の通勤ラッシュはとうに始まっている。その合間を縫うように大輔はトラックを巧みに操る。

バツジつてのはそっちかよ。やってらんねえな。胸の中だけの躁り言。

「ご自分さえ平和に暮らせるのなら、全てはなかったこと。そんなんですね、久住さん」

「あのさあ、おれあんたと初対面だよな？何で朝っぱらから突っかかれて絡まれなきゃなんねえの？」

低く唸るように大輔が吐き捨てる。むかつく女。チーフの野郎、監視役でもつける気か。おれが暴れすぎだときゃあぎゃあ騒いでいたからな。ため息をつきかけた彼に、美羽子は追い打ちを掛けるような言葉を発した。

「初対面ではありません。久住さんとは一度、お逢いしたことがあります。どうせ…憶えてはらっしやらないと思いますが」

「はあっ？」

おれに何を言いたいのだ、この女は。それでなくとも朝田の名が、

おれを闇へと引きずり込もうとしているというのに。非常に強い精神力でそれを何とか抑え込んでいるのがわからないのか。

「自分は…朝田苑子の従妹です」

きっぱりと告げる美羽子の言葉に、大輔は思わず急ブレーキを踏んだ。そばを通るダンプから、ざけんなバカ野郎！と怒鳴られ、無意識に片手を上げて頭を下げる。

顔色はおそらく青いどころか白くなっていただろう、大輔ほどの男が。

「久住さんにとっては『のこちゃん』は過去のことなんでしょう？だから笑える。仕事を続けられる。楽しそうに日々を送れる。のこちゃんはできなかったのに。自分たちから、のこちゃんを奪っておきなながら」

不意に美羽子の声が途切れた。大輔がアクセルを踏み込んだからだ。渋滞の列に無理やりトラックの鼻先を突っ込ませると、何車線にもまたがってジグザグに道を進んでいく。

黄色から赤に変わるうとしている交差点に、加速しつつ右折をする。と雑多な街道へと車を走らせた。

美羽子の表情が凍り付く。そこは二十四時間営業が当たり前前のホテル街。

「最初の配達先とは住所が違います！自分をどうするつもりですか！？」

「うぬぼれんな、この自分女！どっかの体育会系実業団にでもいたってか？これも仕事だよ、所長にチクったらただじゃおかねえからな！」

美羽子が唇を噛みしめた。大輔は怖い顔をしたまま、宅配トラックを……歌舞伎町へと走らせていった。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009 - 2011 keik
itagawa All Rights Reserved

5

5

雑居ビルの建ち並ぶ一画を器用にすり抜けて、大輔は商用車を動かす。ちょっとデカ目のトラックくらい手慣れている。運転免許という免許は全て全部取らされたからだ…防衛隊にいた頃に。

別に輸送科所属というわけでもない。空挺四班は独自の動きをすることがあるからと、手当たり次第にさまざまな資格と技術を身に付けさせられた。苦に感じるような大輔ではなかったが。

細い路地には派手な看板が目につくようになってきた。派手というより、どぎついという言葉の方がしっくりと来るか。

一軒の店を確認すると、その看板の目立つ表ではなく裏口へと宅配トラックを滑り込ませた。

「ここで、何をする気ですか？」

こわばったままの声で美羽子が詰問する。別にあんたを売り飛ばそうなんざ考えてねえから、と軽口で返す。

「もうこれは宅配屋のお仕事が始まってるとだからな。うすらボケてんじゃないぞ」

低く彼女に釘を刺しておいてから、大輔は「おはよーございまーす！」と声を張り上げた。

「なあんだ、大ちゃんじゃない。今朝もまた本舗さんトラブったの

お？」

疲れの残る顔で店のママが腕を組む。そうなんすよ、ったくあの担当どうにかした方がいっすよ、あくまでも明るく大輔が応える。

「新しいバイトお？ずいぶんまあ、若い女の子だけど。今日の分、けっこう荷物重いわよう。大丈夫なのお？」

「自分は体力には自信があります！」

きっぱりと言い切る美羽子に、はん、無駄に元気がいいこと、とママはタバコの煙を吹きかけた。

「つつうらしいっすから、おれ楽でいいわあ」

先ほどまでの怖い表情をおくびにも出さず、大輔は呑気に首を回す。ママは彼の肩に手を掛けると顔を近寄せた。

「ねえ、一回でいいから客で来ない？みんな期待してるんだけど」

「いやあ、千早姉さんのとこさマニアックすぎて。おれの勉強不足っすー！」

やだあ、露骨に拒否られちゃったあ。千早と呼ばれたママはころころ笑っ。

「これで…全部ですか？」

体力には自信があると言ってしまった手前、大輔に持ってくれとは

意地でも頼めないのだろう。何箱もある使用済みのタオルを持ち上げ、美羽子はその重さに歯を食いしばっている。

…あーあ、頑固で強情だなあ、この女…

それでも「持ってやろうか」とも言わずに、ゆっくりと伝票に必要な事項を書き込んでいくのは大輔。いい性格をしているとはよく言われること。

「では、と。『きのうのニヨー』様のお荷物、確かに承りました。納品は本舗からになりますので」

はいはいはい。わかりきったことはいいからと手を振るママに頭を下げて、大輔は軽いカバン一つをぶら下げて口笛を吹きつつ歩く。横でよたつく美羽子に薄笑いの視線を向けて。

「ずい…ぶん、重いものですね。おしぼり程度の大きさのタオルなんですよね」

「ああ、それ？使う前はまだそう重みもないけど、水分含んじゃうとねえ」

『きのうのニヨー』って、変わった店名ですね。重さから気を逸らせたいのか、美羽子の口数が増える。

「最近流行の実写版アニメ映画みたい。キャバクラですか？」

「キャバクラって…似合わねー、あんたの口からそんな単語。あの

店さ、おれも客で行くには敷居が高くつてさ」

そんなに高級なんですか、声がうわずる。

「いや、店の名の通り…中級マニア向け…つうかなんつうか。同好の士じゃなきゃムリじゃね？」

「マニアって？」

本気できよとんとする美羽子に、意地悪げな含み笑いを向けて大輔はひょうひょうと言葉をつなげた。

「そのまま漢字変換してみ？まあその女王様…つうのがいてな、朝っぱらから何だけど…そちら様の小の方を掛けていただくというプレイが中心の…」

いくら何でも意味がわかったのだろう、美羽子の動きが完全に止まる。じゃあ、このタオル…呟くあとが続かない。

「お客様からお預かりした大切な商品だ。落としたら信用問題に関わるからな。し・っ・か・り・持てよ!？」

こんなときばかりドスを利かせてみせる大輔に、美羽子は一瞬だけ恨めしげな視線を向けた。

荷台の手前にきちんと並べてしまうと、美羽子は息を大きく吐き出した。

「本当にこれ、通常業務なんですか？」

肩を上げ下げする彼女に、んな訳ねえだろ小遣い稼ぎだよ、と小バカにしたように声を投げつける。無言の非難の目に、何でうちの会社が弱小のくせにドライバー二人組にしてるのか知ってるか、と問い返す。

「えっ？」

「ふっーさ、宅配のドライバーって一人じゃん。でもうちの営業所エリア考えてみ？」

少しばかり美羽子の瞳が空を向く。あっ、という声にならない声。

「おっかなくて若い姉ちゃんだけで行かせられっか？ごくごくありふれたマンションだと思っただけで持って行ったら、中に半裸の美女が五人も六人も着替えてたりさ。いろんな事務所様だとクレームの付け方も年季が入ってやがるしさ」

大輔の薄笑いに苦さが加わる。ただの繁華街では済まない地域なのだ。バディ態勢を取る分、ひとりひとりの人件費は抑えつけられる。

「給料安くてやってられねえってね」

生き続けるにはお金がいる、だからどんな仕事も受けるんですか。美羽子の棘を大輔はさらりとかわした。

「今朝は別口のせいで忙しいんだよ。さっさと乗り込め！」

次の集荷先、店名だけでも教えてくださいと美羽子の固い声。怖じ気づいたんか？と嘲笑う。

「そんなことはありません！けれど、こちらにはこちらの心の準備というものも！！」

「あーわかったよ、メンドクせえ女。次は確かええーっと、ああ、あそこだ。『エロサイズのハラ』」

ごふっという耐えに耐えた音が、美羽子の口からこぼれる。客前で顔に出すなよ、あんただってプロなんだからな。たとえ今日が初日でもよ。唸るように言ったのは大輔の方だというのに、当の本人は「ありえねーよなー、このネーミング！」と大笑いしている。

「まあそこは一般的なキャバクラだから、安心しろや」

そこでも大輔一人は、アゲ嬢のクセが抜けきらない若い雇われママに腕を絡め取られる。荷物は美羽子に全てお任せだ。

「次は！？ていつか何軒回れば通常業務の方をやらせてもらえるんですか！？」

さすがの美羽子も、別の意味でキレ始めた。それはそうだろう。貸しタオルと言っても飲食店用と風俗店用では、一応きっちり分けられている。両者とも使う量は半端じゃないが、搬入までは扱いを丁寧にしないとややこしいがどちらかは火を見るよりも明らか。

「次？まあ行けばわかるよ」

なぜか含み笑いの大輔に、美羽子は朝一番の重い怒りよりももっと単純なむかつきを見せ始める。

…恨みを持ちながら、人は二十四時間生きてられねえんだよな…

日常生活という罫。それは確実に大輔をもむしばんでゆく。その痛みを知っているからこそその刹那的な生き方と、堅実な日々をきつちり送る。

それが彼の出した結論だった。何があっても生きなければならぬのなら、な。

三軒目の看板前で美羽子は固まった。驚きよりも無表情と言うことは、少しは耐性ができたか。大輔は横を向いて笑いを必死にこらえる。

「『うちゆうへんたい…かまとと…』で、読みは合ってますよね」

声の抑揚までなくなっている。頼むから淡々と音読するのやめてくれ、腹筋が痙攣しそうだと言腹を押さえる大輔に、彼女は唇を尖らせた。

「大ちゃんじゃーん！ー！ひさっしぶりねえ」

夜通しの仕事を終えてもハイテンションの、なじみのオーナーに迎えられる。

「あざーす！てか寺島さん、また店名変えたんすか？今度は何これ」

「『宇宙変態カマトト』いいでしょ！？もうね、自称バージンが集

まる、集まる！！」

カマトトってそっちなんだ。へんなところで感心している大輔の背中越しに美羽子を認めたのだろう、オーナーが気さくに声を掛ける。

「へえ、大ちゃんにしたら良い子見つけてきてくれたじゃない？」

「ちょっとオーナー、世間ずれしてねえうちの新人バイト、スカウトしないでくださいっすよ」

苦笑いの大輔を無視するかのように、オーナーが美羽子へ「うち来ない？時給いいわよ」と誘いを掛ける。

「まあ、自己申告で良いんだけど採用条件満たしてるかどうかよねえ。そこんとこどうなの？あんたって！？」

あまりのことに目を白黒させ、硬直しきっていた美羽子はもちろん黙ったまま。そこへ、まあ十中八九は経験無しと見たわねえ、とオーナーが豪快に笑う。

「免疫ないんだから、あんまり遊ばないでやってくださいよ」

これでも助け船のつもりなのだろう。大輔ののんびりした声。それよりも大きなオーナーの大声が響く。

「どっちなの！？接客業ならはっきり答えなさいよっ！？」

「どっちって、あの…」

さっきまでの勢いはどこへやら。すっかり怖じ気づいている美羽子

に「バージンなの！？どうなの！？」とさらに追い打ちを掛ける。

思わず美羽子は「はいっ！！あ…いいえ」と直立不動の姿勢を取った。

ぐふっ。笑いをこらえようにもこらえられないのはもちろん…大輔。そちらをめいっばい睨みつけてから美羽子はきっぱりと言いつつ切った。

「いえ！自分は男性経験はあ、あります！」

げほっげほごほ。あまりの笑いにむせ込む大輔は靴先を踏まれて「いて！」と叫んだ。

「プロなら顔に出さないんでしょう！？」

完全に美羽子が怒っている。頬が赤い。その姿を見て、オーナーと大輔は耐えきれずに顔を見合わせて笑い転げた。

「これも職務なんですか！？」

「職務だつつつたら、あんた何でもやるの？」

にやにや笑いが消えない運転席の大輔に、ふうと息を吐いた美羽子は最初の冷やややかさを取り戻した。

「自分はもちろんそうします。久住先輩と同じように。生きている人間に銃を向けることもためらわない」

一瞬で醒めた大輔は、面を引き締めた。ぶっそうだねえ、と口では言いつつも。

「威勢が良いねえ、自分女。前職は婦人警官か？それとも現役の、か。まあありそうな話だよな。ケイさんってお知り合いがいるんならさ」

「自分は」

言葉を不意に切った彼女は、変わったばかりの信号で車が停止したのを確認してからこう付け加えた。

「防衛隊空挺方面特科第二班で通信を担当しておりました。残念ながら、希望する四班には入れなかったけれど」

大輔は無表情のままブレーキペダルに足を置いていた。事故を誘発する急ブレーキを避けさせたのか。小賢しい女。

「何も訊かないんですね」

「かんけーねえもん、おれ」

ぼそっと吐き捨てる。追いかけて来たってか。朝田苑子の従妹と名乗る女。空挺の別班に属し、今また堂本警視とつながりを持ち、チ

エリー運送でバディを組ませられ。これもみな警視庁組織犯罪対策室の上司の画策だとしたら、面白くねえ。

「次で最後ですね、孫請けの集荷作業も」

「ああ。『オ（・）ラの泉』って店。カツコの意味が今でもわかんねえんだけどさ」

さつき出た物騒な単語は、あっさりとスルーするに限る。大輔の不快感は高まるばかり。

「今までの店名に比べたら、大人しい気がします」

こちらも平然と言い返す美羽子。適応能力はあるということか。けれど、一緒に組む気にはなれない。こいつは危険だ、おれにとって

「店の名前はふつーだけどさ、そこ、ソープだから。いきなり本番はきついだろうけど、あんたが入店勧められてもおれは止めねえよ？ 職業選択の自由ってもんがあるからねえ」

嫌がらせなのかと思っていました。減らず口の大輔の挑発にさえ反応を返さず、美羽子はフロントガラスをじっと睨みつける。

「でもこうして風俗店の裏側と接点を持つことで、久住先輩は情報を手に入れる。顔を売り、つながりを深める。外側だけを見ていてもわからない、意味のある行動。先輩は何の為にこの二重生活を続けているんですか」

あのさあ。ゆつくりと動き出したトラックは、今度はスムーズな発進で済んだ。感情を押し殺せ。言葉でいくら責め立てられようと痛くもかゆくもない。大輔の顔に浮かぶ、いつもの表情。

「あんたが今朝になってバイトで来るとも、バディ組まされとも知らなかったの。わかる？勝手に何でも決めつけんなよ。本気でソープに売りつけてくんぞ!？」

パウハラ。セクハラ。モラハラ。ぶつぶつ口の中で美羽子が呟く。大輔の怒りは沸点に達する。

「てめえあのなあ!!こつちにだって選ぶ権利くらいあんだよ!!悪いが命張つてんだ!てめえみてえな私怨剥き出し女と、組めつて言われても危なくてやってらんねえ!!こつちがお断りだよ!!」

「命を張っているんですか。久住先輩は生き残りたいんですね。罪のない民間人を死に追いやっておいて」

次の信号を律儀に待ってから、大輔はきつく目をつむった。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009 - 2011 keik
itagawa All Rights Reserved

6

6

あの日……首都圏郊外の山中で行われた訓練は、本来は通常の模擬弾使用であるはずだった。

そもそも他の方面隊が実弾を使う場合は実施前の手続きが煩瑣で大変だということくらい、下っ端の大輔たちにも重々わかっていた。事前準備に実弾、薬莢の数の確認の徹底。一つでも欠片が見つからなければ夜通し捜させられる。これは別に大げさでも何でもない。

市民の安全を守る為に公的機関に属する現場の人間が職務で銃を使用してさえも、殺人罪で起訴されうる国……実弾へのアレルギー反応は思いのほか大きい。

が、現実には空挺四班では頻繁に実施される訓練ではあった。当然すべては内々で行われている。実弾と空砲では、撃ったときの反動も違えば手応えも違う。だいたいいざという緊急の有事の際に、誰が薬莢の数を気にしていられるだろうか。

だからこそ、突然に訓練の変更を告げられたときにも、そう違和感を覚えなかったことは確かだった。

山中に散った各々がエアガンを手に配置についた頃、上官がそつと大輔の肩を叩いた。

「久住、今から実弾装備に切り替える」

声が心なしに緊迫感を伝えていようような気がした。ただの訓練内容変更ではないのではないか。大輔にも不安感は伝わるが、実働部隊は命令を聞くだけの存在でしかない。

「はい」

短く返答し、重みのある銃を受け取る。

「もう一つ、新たにディレクティブが出された。口外は無しだ」

作戦自体が変更されたのか。指令とは何か。上官の表情がやや曇って見えたのは気のせいか。大輔は身を引き締めた。

「山中に某国の工作員が潜んでいるという情報を入手。十人程度規模のパーティを組み、迷彩の戦闘服を着用しているとのこと。見つけ次第直ちに」

そこで上官は不自然に言葉を切る。とつさに思わず大輔は「捕捉ですか」と問い返した。

が、返ってきた答えは最も厳しい言葉だった。

「いや、相手の身元確認も攻撃を待つことも要らない。発見次第、射殺せよ」

大輔の目が見開かれる。どういうことだ。相手の確認もしないうちに撃ち殺せと言うのか。

「あくまでもこのオペレーションは極秘裏に処理される。証拠を残

すな。それが最終目的だ」

「…某国の工作員であるとの確証は？」

震える声で問い質す大輔に、上官は無言で睨み返した。実働部隊クルアの防衛官ごときが判断することではないとでも言いたげに。代わりに彼はこう告げる。

「…久住、防衛隊の存在意義は何だ」

国民の安全を守るべく有事に備え訓練を怠らないこと…大輔の頭に浮かんだ言葉はしかし、口から発せられることはなかった。上官が黙って頷き「その時期が来たと覚悟しろ」と言い添えたからだ。

この指令が大輔一人に出されたものか班全体の共通理解のものかさディレクティブえ確かめる術もなく、彼は銃を握りしめた。

基本、空挺四班は単独行動を取る。チームを組むのは他の班に任せ、彼らは一人ひとりがスペシャリストとして動けるように訓練されている。

大輔の周りに、今は誰もいない。上官は既に去った。彼はただ一人、全身で敵の存在を感じ取るうとしていた。

迷彩服の男女十人ほど。与えられた情報はそれだけだ。味方を撃つことのないよう、気を張り詰めた。

仲間はそれぞれ、広い演習場に散らばっている。四班がこの山中を演習場として使っていることを知るのは、防衛隊関係以外では自治体の上層部と友好国の軍部だけだ。某国はその情報を手にしていなかったのか。何もわざわざ演習当日に、ここに入り込まなくてもいいだろうに。

…逆、か…

或いはもしかして、防衛隊では某国工作員の動きを事前に察ししていた可能性すらある。空挺四班隊員には告げず、訓練と称して実戦を行わせる…か。何か事が発覚しても、それであればいくらでも逃げ道はある。

しかし本来、考えるのは自分の役目ではない。大輔は身を伏せ、工員らの気配を探る。迷彩を来ているのなら武器携帯の確率が高い。敵に撃たせてはならない。その前に仕留める。

支給された折曲銃床式の89式5.56mm小銃を構え、照準器から辺りをうかがう。

かさり。

不用意に踏まれた枯れ草の音。相手としては、一個小隊が潜んでいることを全く疑ってはいないのか。

反射的に大輔は身体を少しばかり起こし、音の鳴った方向へと銃口を向ける。

…小柄な女。

女性兵士など世界ではありふれているし、防衛隊にも女子隊員は多い。が、相手のあまりの無防備さに一瞬こちらが怯む。

これが作業員だというのか。仲間ではない。確かに迷彩服を着ている。だが、隙だらけで何も警戒などしていない。油断させる為の口か。

大輔が考えられたのもそこまでだった。若い彼女は口元をほころばせるような表情を浮かべたかと思うと、おもむろに手にしていた銃を彼に向けたからだ。

反射的に安全装置を外し、連射・三発制限点射・単射の順に切換レバーを素早く操作する。頭の中は何一つ感情すら湧かない。身に染みてしまっている動作を行ったに過ぎない。身元の確認が楽でさらに確実に仕留める為、体躯の中心部を狙う。

相手がレバーに指をかけようとしたその瞬間、大輔の撃った銃弾が彼女の心臓付近を撃ち抜いた。

…な…ん…で…?…

そう、彼女の唇が動いたような気がした。大きな瞳はさらに開かれ、不思議でならないといった表情で大輔を見据えた。

本当に、作業員なのか。我に返った彼は、ライフルをだらりと下げ、思わず息を飲んだ。

どさりと音を立て、彼女の身体が崩れ落ちてゆくのを…大輔は呆然と見つめるばかりだった。

「一番先に、のこちゃんへ駆け寄ったのは自分です。信じられなかった。ふざけて血糊でも用意して倒れたフリをしたんだとばかり思った。でも、目を開けたままののこちゃんは、もう息をしていなかった。自分たちはサバイバルゲームのオフ会をしていただけなのに」

そう…。大輔が手に掛けた彼女は初めてサバイバルゲーム、いわゆるサバゲーのオフ会に参加したただの女子大生だった。着慣れぬ迷彩服に買ったばかりのエアガン。撃ち方もろくに知らないまま、それらは自身の血にまみれた。

「そのあと、ずっと防衛隊に取り調べと称して拘束され、意味もななくスパイの疑いを掛けられ、誰に何を訴えても取り合ってもらえなかった。家族もみんな脅されて。自分たちは『のこちゃん』の存在すらも忘れろと強要されたんです」

宅配トラックは路肩に停めてある。とても走らせるだけの気力がさすがの大輔にもなかった。大きなハンドルの上で手を組み、顔を伏せる。もうその話は頼むから…やめてくれ。それさえも言えぬまま。押し込めろ、閉じこめろ。危険な記憶はなかったことにしろ。おれはもう、空挺四班とは何の関わりもない。いくら引き留められようが呼び戻そうと声を掛けられようが、頑なに拒んできた。

おれはもう、ただのバイトでいい。弱みを握られて警視庁の片棒を担がされているのは単なる不運だ。

すうと呼吸を整えると、大輔はその姿勢のままに問うた。

「設定が甘いねえ、朝田さん。何班所属だろうが空挺方面に入るには徹底的な身辺調査と思想チェックが入る。関係者だと言い張るあんたが、そもそも防衛隊員になれる訳がねえ。お涙頂戴話をでっち上げて、どうするつもりだったんですか？えっ？自称・従妹さんよ」

まるで自分に言い聞かせるように。あのことはなかったのだと自分で信じたのが為に。罪悪感からこんな危険な二重生活を送っているつもりなんぞ、おれにはこれっぽっちもないのだから。

美羽子は大輔の方を向く気配も見せず、きっぱりと言い切った。

「全部言いました、正直に。自分は従姉を死に追いやったのが某国であると思っていると。なら、せめて自分自身に力をつけて国を守る為に働きたい。防衛隊ではその思いを受け入れてくれました。もともと、放っておくよりは手元に置いた方が安心というほうが本心かも知れませんが」

「…そこまでして入った空挺、何で辞めたの？」

大輔の中で、記憶を押し込める作業は続けられていた。出てくんなあの驚愕の表情も大きな瞳も。ふざけて遊んでと言われれば納得できるような、隙だらけの銃の構え方も。誰からも責められなかったその後のことも。

すべて、すべて脳の記憶領域から消え失せてしまえ！！

頭の数%で、配達のことを気にしている。時間が迫っていることもノルマがこなせるかどうかということも。

これだけのダメージを受けながらも、日常は否応なしに押し寄せてくるんだ。頼むからおれに普段通りの生活をさせてくれ！

「辞めた理由は一つです。空挺方面に配属されても、久住先輩はもういないということがわかったから」

…従姉を殺したおれが憎いのか、そんなにも…

淡々とした美羽子の物言いに、大輔は何も言い返すことができなかった。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009 - 2011 keik
itagawa All Rights Reserved

#7

#7

朝っぱらのソープなんざに機嫌のいい従業員がいるはずもなかった。元気よく挨拶をして入っていった大輔は、仏頂面の支配人に睨め付けられ首をすくめた。

「あざーす。そんなニラまないでくださいって、沢口さん。ただでさえ怖いのに」

さっきまでの動揺などなかったかのように、大輔はそれでもへらへらと薄笑いで話しかける。

「おせーんだよ、バカ大。オシボリ本舗から連絡来たの何時間前だと思っただけ？え？こんなだりい朝っから、てめえのにやけヅラなんか見たかねえよ」

今までの店を仕切る女どもとは違い、明らかに地下の空気を漂わせている支配人は、低い声で唸った。ふと、隣の美羽子に目をやると、彼はふんと鼻を鳴らした。

「ヤバイバイトに首つっこませていいんかい？こんな世間知らずの姉ちゃんをよ」

女子大生なんて今どきどこの風俗でも流行らないぜ、と唇を歪ませる。

自分は学生では！と勢いよく言いかけた彼女の口を慌ててふさぐと、人手が足んないんすよと大輔は苦笑いで返す。

「じゃ、これで。またよろしく」

さっさと受け取る荷物をこれもまた美羽子にすべて持たせると、大輔は言葉少なに店を出ようとした。

彼女とのやり取りが応えているわけじゃない。ここに長居は無用だ。何だそれ、必死に自分へと言い訳か？いやに苦い感情がこみ上げてくる。

「おい、大。ちょっと顔貸せや」

目だけで合図を送ってくる支配人の沢口に、今度は大輔の方が美羽子を手で追いやる。彼女の表情が険しくなるが構ってられるか。

…警視の名前を出したからと言って、こいつが本当に桜田門かどうかはわからない。ヘタしたら空挺の回し者かも知れないってのにな…

追われる筋合いはない。探られて痛い腹もない。が、不快感はぬぐえない。平常心を失えば命取りのこの仕事。まあ、どこで落としても気にも掛けない生命だっつえばそうだけどさ。大輔は口にも出さずにつそぶく。死なないだけ。今のおれがしているのはそれだけだ。

店の奥に引つ張り込まれた大輔は、沢口から腕をぐいと掴まれた。

「な、何すか？」

「女一人回してくれや。さっきの姉ちゃんみてえなあんなシロウトじゃなく、使える上物をな」

囁く声色は完全に裏家業のもの。ビビる大輔ではなかったが。

「やーめてくださいよ。おれ堅気なのにさ。回せる女なんているわけないっしょ」

よく言うよ。沢口がまたも鼻で笑う。白勢会とは対立関係にある眉敦連合が取り仕切るこの店で長年勤め上げている彼もまた、筋金入りの極道だ。

「白つちいのと派手にやり合っただって？名前が売れてさぞかし有頂天になってる頃だと思つてよ」

あの件を知るのは組と言つても上層部のみだろう。少なくとも大輔と警視庁を結ぶ線までばれているとは思いたくはない。

「どっからそんなテキストな噂。ったく、何かあればみんなおれのせいにされるんだから。やってらんないっすよね」

意味ありげな沢口の含み笑いに、知らず大輔は目を細める。

「なあに、白勢会にしたところで兎玉は切りたがってたからな。上のヤツらにとっちゃ、桜さんとはきっちり話がついてたんだろうよ。どっから頼まれたんだか知らねえが、あんたもご苦労なこつた」

つまりおれは、二重三重のダシに使われただけってか。まあしゃあねえや。呆れ混じりに首を回す。

「だからまあこっちもな、ヘンなしがらみのねえ大が一番使い勝手がいいんでね」

本当のところはとてつもなくやつかないしがらみ付きですがね、とこれは言わずにおいた。

「言っときますけどね。おれ、ただの宅配屋ですから。バイトつすから。荷物は運んでも女の調達なんざ…」

「ま、あちこちに声掛けてみるけどよ。ホントにこっちも人手が、ね。誰でもいいって訳にゃいかねえんだよ」

大輔の話を聞いているのかいないのか、沢口は片目をつぶって見せた。この海千山千の支配人がこれだけ言うつてことは、女性を必要としているのは「オ（・）ラの泉」なんてふざけた名前の店の方ではなく、裏の会員制超高級ソープの方なのだろう。ますますおれには縁のない話だ。大輔はすつとぼけた顔で、大変っすねえ、と笑って見せた。

あくまでも警視庁組織犯罪対策室が取り締まっている対象は、不法入国で働かせ続けられている風俗嬢らの救出と雇い主の摘発のほず。沢口の絡む店からだって、命令があれば足抜けをさせなければならぬのだ。

敵に回したかねえなあ。沢口さんおつかねえし。大きなため息をつけてから、大輔は天を仰いだ。

「情報収集ですか？潜入捜査官みたいですね」

美羽子の声がとがる。答えもせずに大輔はハンドルを切り続けた。狭い路地をかいくぐり、今度はきちんとチェリー運送が手がける正規の荷物をさばいていく。もともと大輔の仕事は早いと言ったところではないし、美羽子もまた当然のように勘がいい。朝のタイムロスなどあつさり取り戻し、昼前には二人を乗せたトラックは公園前の路肩に静かに停まっていた。

すぐに気を利かせて彼女が缶コーヒーを二本、手に入れてくる。渡されたとき、指先が触れた。

怯えたのは……大輔の方だった。

美羽子の方はまっすぐ前を見据え、ゆったりと缶をかたむけている。受け取ったコーヒーを持って余し、先にタバコを取り出してから口にくわえる。

「車内禁煙じゃないんですか」

「はあ？何か言いましたあ？」

つつけんどんに言ってはみるが、どうも勝手が違ってやりにくい。こいつと組まされるのだとしたら、今度こそ本気で堂本警視とは縁を切ってやる。心で固く誓う。

「荷物にタバコのニオイがついて困る。最近、その手の苦情が多い

と聞きました。ですからつきり煙草は禁止なのかと思っていたので、久住先輩」

「その口調、止めてくんね？ここ別に運動部じゃねえし。今度先輩とか抜かしたら、ホントに売り飛ばすかな」

怒鳴りつけたいくらいの思いは、どこかでしぼんでゆく。朝田…苑子。結界が張られたように避けてきた名前が目の前に突き付けられ、このままでは自分が立ってられない。

…なんてザマだろうねえ。どんだけの修羅場でも何とも思いもしなかったおれがさ…

生き残ろうと願わなければ恐怖もない。だから堂本に便利屋のように使われても文句一つ言わず。

「じゃあ、久住さん…ですか？」

女に名字で呼ばれるなんて、最近じゃ滅多にない。よしてくれ、と思わず吐き捨てる。

「いいよ、大輔でも大ちゃんでも。どうせみんなそうやって呼ぶんだからさ」

「なら…大輔、先輩？」

何を考えているのか、そつと呟く美羽子に、感情が突然爆発する。

「先輩って呼ぶなっつってんだろっ!?!ここは防衛隊じゃねえ!」
冷やかな視線がまた大輔を捉える。ようやくわかりました、と。

「防衛隊のことを思い出したくないんですね。だから自分のことも避けるし、わざと茶化すような言葉しか遣わない」

「あんたとは何があっても組まないからな」

噛みしめた歯の隙間から、絞り出す声。それは警視に言ったださい、とあくまでも冷静な美羽子の言葉。

ああそうだ、桜田門に集合だったっけ。どうせまた気の重い仕事を押しつけられんだろ。それでもいい、生きているうちの暇つぶしになれば。

大輔の手の中で、ゆっくりと醒めてゆく缶コーヒーは、まるで奪われてゆく生き物の体温のようだった。

「そういえば、さっきの店のことなんですけれど。『オラの泉』ってソープラントなんですよね」

一度目をつぶってからプルトップを乱暴に開け、中の液体をぐいと飲み干そうとしていた大輔は、突然の美羽子の声に咳き込んだ。

「げほ、ごほごほげほ。んだよっ、いきなり!?!ようやくあんたもそこで働く気になったか!?!」

こぼれたコーヒーを拭こうとティッシュを差し出す美羽子の手を、
思わず払いのける。

まだむせ続ける大輔をまっすぐ見据えると、彼女は言った。

「パク・ユンナ。Kポップの代表的なアイドルのはずの彼女が、ど
うしてあの場にいたんでしょうか。ソープランドは唯一、実際の行
為が行われる風俗店だと聞いているのですが」

「はいいっ!?!?」

こいつの言葉は何でこうも、いつだっておれを驚かせやがるんだ!
大輔の手の中で、デミタス缶がひしゃげた音を立てた。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009 - 2011 keik
itagawa All Rights Reserved

8

8

「しっつけえなあ、後ろのびーえむ」

半ば無意識にミラーへと目をやると、大輔は独りごちた。真夜中の裏道をひた走る商用大型アルミバンへとびったり張り付くBMW。もちろん堅気が乗るような形状をしてはいない。

「まきますか」

助手席でさらりと美羽子が口にする。その言葉に大輔は思わず強く言い返していた。

「ざけんな！運転してんのはこっちなんだよ！てめえはのんびり助手席でふんぞり返ってるだけじゃねえか」

ならいつでも替わりますが。平然と応える美羽子。運転技術にも自信はあるのだろう、大輔と同じ空挺出身者としては。それがわかっているだけに、大輔はむくれて押し黙った。

こいつとバディを組むつもりなんぞさらさら無かった。あの夜、警視庁組織犯罪対策室へとしぶしぶ出向いたのは、チーフである警視の堂本へとはつきり断りを入れるためだった。が、当然のこのように大輔の希望は受け入れられはしなかった。

「こんな女とじゃ、危なっかしくてやってらませんって！」

大声を出すな。冷徹なほど落ち着き払っているはずの堂本は、大輔の前だけはなぜか勝手が違うようだ。右手で額を押さえるため息まじりに諭そうとした。

「女だからと、戦力で劣るつもりはありませんが」

「自惚れんな！この体育会系女！！」

「自分の名前は朝田です」

こちらもまた落ち着き払った態度で横に立つ。朝田美羽子。こいつはわかって言ってるやがる。おれが朝田の名前を出されただけで動揺するだろうと。

何もかも大輔にはおもしろくない。

「負担が大きいと嘆いていたのは久住の方だろうが。ちゃんと人員をつけた。文句はあるまい」

そう歳が上とも思えないキャリア組の警視が取りなすように間に入る。言ってしまったから、たぶん多少なりとも後悔はしただろうが。大輔の矛先が堂本へと向かう。

「やり方が汚ねえって！何の罰ゲームつか、これ！？この女は初対面だつつうのに朝からおれに絡みまくるし！こいつと組んで仕事した日には、命がいくつあっても足りやしませんって！！」

吠えるように噛みつく。そうとう鬱憤がたまっていたに違いない。

堂本の視線がうんざりとしたかのようにさまよう。

「命が惜しいんですね。久住先輩でも」

トゲさえもなく淡々と言葉を添えるのは、朝田美羽子。何度も激昂するほど大輔もバカじゃない。

「…これだよこれ。チーフ、これを一日中横でやられてみてくださ
いよ！病みますよ、おれ」

朝田苑子の事件を、どの程度まで堂本が掴んでいるかは知らない。
もとよりそこまで突っ込んだ話はしたこともなかった。大輔が…す
るはずもなかった。

が、今になつて苑子の関係者、それも大輔の復帰を未だに強く要望
し続ける防衛隊空挺方面特科、そこ上がりの美羽子を彼と組ませる。
何らかの大きな意図が無いわけがない。

堂本の表情からは何も読み取れはしなかった。正式に警視庁内にあ
るにもかかわらず、公表もされない組織を仕切るキャリアとしては
当然か。

「おまえがきちんとここでの職務を指導しろ。朝田にな」

わかってないんだから、やってらんないっすよね。怒りは動揺は恐
怖は、すべて飄々としたばやきに変える。それが大輔のせいいつぱ
いの抵抗だった。

「言っとくけどな、朝田さん。おれの命がどうのこうのじゃねえん
だよ。クライアント様の安全を確保しつつ、無事に入管に送り届け

る。ちまちまと手間暇かけておれたちは不法入国者を強制帰国させていく。それをネタに上の方でどんな思惑があるうと駆け引き取引があるうと関係はない。そういったことには一切目をつぶってこき使われるのがおれたちの仕事。大事なのはな、祖国に帰すまでクライアントに傷一つつけるなつつうことだよ」

美羽子は視線を前に据えたまま、黙っている。聞いているのか、それとも大輔の言葉を言い訳ととらえているのか。

「バディ組む相手を心底信用できないで、この仕事ができるわけ無いでしょ？わかります？どうーゆーあんだ…」

小バカにした物言いに、美羽子はあごを上げて大輔の方へと顔を向けた。

軽蔑、か。

したかつたらいくらでもしろ。憎んでくれて大いに結構。てめえとは一切組むつもりはねえ。

声に出さずとも伝わるのだろう。お互いの不信感が。

「職務は職務です。確実にこなしますのでご心配なく、久住先輩」

先輩と呼ぶなとあれほど…。はあ、とまたため息。だつたら余計な私情を挟むなと釘を刺す。どうあがいても堂本は…上層部は美羽子をおれと組ませる気なのだろうから。

「…のこちゃんのごことは、余計なことなんですか」

「てめえの命も惜しかったら、その私情こそ挟むな！特に仕事の中に一言でも口にしてみる！女だろうが何だろうがぶん殴ってその場

でバディ解消だ！！」

耐えきれず怒鳴る。何がしたい、何がさせたい！？おれの古傷を、いや決して古くない事件を蒸し返して動揺させて、おれをどう操りたいんだ。

彼自身、優秀な隊員であったことには違いない。けれどここまで手間暇かけて引き留めるほどのもんでもないことは、大輔自身が一番よくわかっていた。

まっとうな理由で防衛隊に入った奴なら、一度は憧れるく防衛隊空挺方面特科第四班>。志願者など掃いて捨てるほどいる。

「では、組んでいただけるんですね。私情を挟まないのなら」

勝手にしろや。吐き捨てる。黙って事の成り行きを見ていた堂本は、今までのやり取りなど無かったかのように二人の前に資料を広げた。

荷台にはこれまたいつものように、東南アジア系美女が二人。このクライアント様を今夜中には入国管理局へと送り届けなければならぬ。足抜けのための夜逃げと見せかけ、その間に説得をし、彼女ら自身に置かれた状況を理解させ。

あとは、後ろの組関係者の皆様にもこの方向性をご納得いただけるように。って納得なんぞしてもらえるはずもない。

貴重な金づるである不法入国のホステスには、稼げるまでかなり前

投資をつぎ込んでいる。人身売買という犯罪である海外での買い付けと、偽パスポートの作成。うまく入国させてからは管理局の摘発との戦い。十分客を取らせてからでないとい利益は上がるまい。

特に最近、逃がし屋と呼ばれるやっかいな商売人も増えてきた。女の方だとしてたかきでは負けてはいない。一度目こそ素直に売られてきたとして、次には自分を高く買ってくれる先を選ぶようになる。しがらみも義理も彼女らには何ら関係のないことだからだ。

組から組へ。もしくは組ではないもつと大がかりな組織へ。それは海外とのつながりをも含める。

間を取り持つのが、逃がし屋だ。

チエリー運送の<サトウ>と言えば、方々の組関係者の上層部には名を知られはじめて来ている。下っ端にはわかりようもないだろうが。

仕事を始める前に、美羽子は眉をひそめつつ訊いた。

「こんなに派手に会社のトラックを使ってしまって、チエリーさんが報復されることはないんですか」と。

「ないね」

大輔のいらえは短かった。応える気がないのかと美羽子の顔がわずかに険しくなる。

「あ・の・な！大人の事情つつもんがあるんだよ」

困惑は広がるばかり。

いつもエラそうな彼女のその表情に少しは溜飲が下がったのか、大輔は面倒くさそうにそれでも言葉をつないだ。

「うちの営業所長なんざ、ただの気のいいおっちゃんだ。けどな、本社のチエリー運送自体は桜田門の息がかかってる。下手に手など出せないことは、その業界関係者ご一行様にはイヤと言うほどわかってるんだよ」

んでな、サトウという跳ねっ返りが会社内に緒で勝手にやっていると逃がし屋をよ。

「それが皆様の認識だ。覚えとけ、てめえもその中の一人だかな」

「チエリーの逃がし屋は一人ですか。久住先輩だけ？」

いちいちカンの触るように先輩をつけるのは、どうやら止める気はないようだ。まあ美羽子に大ちゃんと呼ばれても、それはそれでしやくに障る。

けれど、さすがは痛いところを突いてきやがると大輔は感心した。チエリー運送自体が組織犯罪対策室の仕事を請け負っているのならまだわかる。が、大輔の知る限り、会社に黙つての内職はともかくこれだけ危険な逃がし屋をしているのは自分だけ。

効率が悪いにも程がある。摘発ではなく自主帰国を促すためにここまでしなければならぬのか。チーフは、大輔が目くらましになっ
ていてくれる間に、その上部組織を潰しにかかっているのだと言う。確かにこれまでもいくつかの悪質な店を一斉摘発してきたことは事

実だ。

きっかけを作れ、呼び水を引き込め。久住の仕事はそこまでだ、と。

「だからな、おれたちは言われたネエちゃんたちだけを運べばいい。見聞きした余計なことなんぞ、一切口にするな。気にもかけるな。ただの下っ端には関係のないことだ」

それはこの間の…。言いかけた美羽子をびしりと封じる。

「パク様でもヤン様でもチェン様でも何でも、おれたちにはかんけーねーの！」

恐ろしく勘の良いであろう美羽子は、それ以来沈黙を守っている。だまって昼間の通常業務をこなし、それなりにパートのおばちゃん方にかわいがられ、夜は夜で「送り狼なんて、今頃流行らないからね」。女から積極的に行くのよ」と見送られ。

逃がし屋稼業もどきの助手席で、美羽子は的確なナビゲートを行う。自称、元空挺の通信業務後方支援はこけおどしではないらしい。

「今、最適な逃走経路を割り出します」

端末を操り、裏道を探しているのだろう。小さなキーボードを操作する音だけが響く。

「いや、いい。後ろの連中は逃がしてくれそうな面構えにも見えね

えし、入管までひつつかれたら後がやりにくい。片をつけてくる
言うが早いか、車を止め、大輔は上着を羽織った。今にもドアを開
けて飛び出しそうな彼に美羽子が声をかける。

「んだよ！！氣い散らすな！」

「少なくとも十人近くはいます。一人で大丈夫なんですか」

そのセリフに、わずかばかりの気がかりそうな声色を聴き取り、か
えって大輔は心を乱された。こんなガキに心配されるようじゃ久住
大輔様も終わりだな。

「うつせーよ。人を無能扱いすんじゃねえ。てめえは後ろのネエち
やんたちの面倒を見てくれ。三十分経つてもおれが戻ってこなかっ
たら」

「…こなかったら？」

今度は純粹に大輔の身を案じる瞳に、彼はたじろいだ。何だこの女
！勝手に違つてやりにくいっいたらありやしねえ！！

「とつとと車を発進させて、入管へゴーだ。おれをピックアップす
る必要なし。援護なんざもってのほかだからな。わかったか！」

ごくりと息を飲む音さえ聞こえる。おれを心配するつもりか、ガキ
の分際で。

平常心を保て、大輔。自分に言い聞かせる。生き残りたいわけじゃ
ない、仕事を全うしたいだけだ。それがたとえ、訳もわからない大
きな動きの齒車にすぎないとしても。

すうつと息を吸って整えた美羽子は、こちらもまた落ち着こうと努力しているようだった。

「わかりました。作戦において上官の命令は絶対ですから」

「…おれは上官じゃねえよ。おれたちはただの宅配屋のバイトだ」

口の中が苦い。

それを振り切るかのように、大輔は勢いよくトラックのドアを開けて飛び出していった。

(つづく)

北川 圭 Copyright? 2009 - 2011 keik
itagawa All Rights Reserved

9

9

BMWのスポーツワゴンからはざっと数えて八人ほどだろうか、ゆつくりと降りてくる。

「四の五の言う前に、定員外乗車違反で白バイにとっ捕まりますよつと。一人多くても最近うるさいし」

大輔の軽口に、ちんぴら風情が浮き足立つ。手で制するのは上の者と相場が決まっている。

「サトウさんよ。細っけえことは言わねえや、ネエちゃんたちを返してくれればそれでいい」

大輔の視線は変わらずにすつとぼけた方を向き、返事もしない。ダブルのスーツ男がこいつらを仕切る責任者というわけか。

じわりと、男どもが大輔一人を囲もつと動く様が見て取れる。彼は力を抜いたまま突っ立っているだけだ。

「あんたが腕の立つ逃がし屋だとは聞いている。こっちも面倒はゴメンなんでね、あんたがこの先のさばろうとバラされようと知ったこっちやねえ」

「ネエちゃんって、何のことっすか？」

とりあえずお約束のセリフを吐いてみる。挑発しているつもりはない。てか、おれ別に逃がし屋じゃねえし。自分のしていることがば

かばかしく思えて、ついて出る苦笑いに、幹部らしい男はいきなり銃を取り出した。

それを合図にか、他の連中も思い思いのチャカを出す。

つたくさ、こっちは丸腰もいいところなんだけどな。あとで無愛想なチーフに危険手当の申請でも出しとくか。

大輔は口には出さず、さも疲れたと言わんばかりに首を回した。

「なぜビビらねえ」

幹部らしい男がドスを利かす。だっておれかんけーねーし。大輔はのんきにうそぶく。

「トーシロがチャカに囲まれたら、ちつたあ腰が抜けてもいいじゃねえのかい。そういう細かいディテールがリアリティを生むんだよ。本当のところは、あんたこっちもんだろ？」

男が昔ながらに頬へ指を滑らせる。大輔は逆に、ヤクザがカタカナ言葉を織り込んで話すことの方に感心している。インテリ系か？そうは見えないんだけどなあ。

「お言葉遣いからすると大卒か何かの団体構成員さんですか、そちらは」

全く怯えるそぶりもなく言い返す大輔に、男は目を細めた。腕がゆつくりと上がる。

怒らせすぎたか、と大輔の方はわざと視線をそらせた。緊迫した空気を少しでも抜くためにだ。

密着させて撃ちこむならともかく、至近距離ならまず当たらない。微妙なこの距離でも当たらない。銃を撃って人に傷を負わせるのはそう簡単なことじゃない。

どれほどの過酷な訓練を重ねて、ようやく思っていた場所に当てることができるようになるのかこいつらは知ってるか。それでも最初は固定された標的がやつとだ。

が、銃を持つ人数が多い。流れた弾が偶然誰かに当たってもそれこそやっかいだ。潮時かなあ。

ふうつと大輔はため息をついた。

「本職さんが銃なんか使うと、一生刑務所行きですよ？この人たちまだ若そうなのに」

ほら、こんな言葉で若い衆は一瞬気持ちは引く。このタイミングを逃さない。地を蹴り出そうとした大輔に、男は冷ややかに言った。

「あんたを撃ち抜いたところで、捕まりやしねえよ」

吐き捨てるようなセリフ。いつもなら聞き流す。そう…いつもなら。

けれど、今夜の大輔には頭をがつんと殴られたような衝撃が走る。ああそうだ、おれはいつもこう言っては相手を脅していた。わざと銃を出させ、自分を撃たせるかのようにして。

…撃ち抜いたところで、捕まりはしない…

現に自分はこうやって罪にもならず、のうのうと市井で暮らしている。刑務所どころか取り調べさえなく。非軍事組織が原則の防衛隊には軍法会議なんぞないから、人を殺めれば刑事事件になるのは同じはずなのに。

大輔の顔色が変わったのが夜の暗さでもわかったのだろう、満足そうに男は続けた。

「ようやく俺らの怖さに気づいたか、鈍いねえ、サトウさんよ。コソクリ詰めで海に投げ込まれれば、よしんば見つかったところで銃痕なんぞ鑑定不能だ。さっさとネエちゃん出せや」

美羽子だ。あいつが来てからというものが鈍って仕方がねえ。これは八つ当たりでも何でもない。それこそ上は何を考えてるんだ？おれが邪魔にでもなっただけ始末したいためにあいつを送り込んだのか！？

大輔の息は荒く、とても落ち着けそうもない。目の前を、驚いて見つめる苑子の顔がちらつく。その…幻影を振り払おうと彼は無駄な努力を重ねた。

消えろ、消えろ！おれはただ命令に従っただけだ！無関係の一般人を撃つたのは、それが秘密裏に下された指令ディレクティブだったからだ。ただの防衛官に勝手な自己判断も命令拒否もできるわけがない！！頼む、消えてくれ。彼女と同じ瞳で見るのは止めてくれ。あどけない、誰も疑うことを知らない無邪気な…死の直前に見せたあの表情でおれに取り憑くな！！

ぎりりと歯を食いしばる。

「悪いけど、今すんごく気が立ってんだよねおれ。手加減できるかどうか自信ねえから」

言うが早いか、大輔は一番近くの下っ端へ蹴りを入れた。足先で手にした銃をはたき落とす。他の構成員たちは訓練なんかもちろん受けてないだろうから、銃口はぶれ、とてもじゃないが引き金を引くことも無理だろう。銃を手放した若い男の腕を逆手に取り、地面へとねじ伏せる。もう一方の足で体重を掛けて踏む。動きを封じてから踵で首辺りをもう一度。そいつを軽い酸欠状態に持ち込む。

横のヤツには隙だらけの脇に手を差し込み、肩ごとすくって腕を膝に叩きつける。ぎゃあという叫び声など気にせず、そのまま落ちた銃を遠くへ蹴り飛ばす。

その身体を利用して隣へとぶつける。何とか大輔を取り押さえようとだんごになっていた二人が、巻き添えになって倒れ込む。

みぞおちへ、顔面へ。手よりも脚を使つての方が長さが取れる。大人数を相手にとりあえず武装解除するには手っ取り早い。

うづくまる男の背中を乗り越えて、岸壁側の数人をなぎ倒す。銃のころがる金属音が夜のとばりに響く。

さすがの大輔も息を切らしている。大きく肩を上下させ、呼吸を荒げる。

いつもならば、飄々と受け流すかのように相手をのしてきたのに。

なぜこんな雑魚相手に本気なんか出してやがるんだ。

自分で自分にむかつて振り向いた大輔に、幹部らしき男は銃を突きつけた。

鼻先に銃口がかかるほどの近さ。これでは外しようがないだろう。いくら銃に関しては素人とはいえ。

いや、あながち素人とも言えないかも知れない。落ち着き払って大輔を睨め付ける目はぎらついていながら冷静だ。そして、大輔もまた、眉一つ動かさずにらみ返す。

さっきまでの動揺は消え、残るのは夜の静寂だけ。

「撃ちたきや撃てよ。撃てるもんならな」

押し殺したような大輔の掠れ声に、男はせせら笑った。それでこちらを抑え込んでいるつもりか、と。

「肝っ玉は確かに据わっているようだな、サトウさんよ。何が目的だ、てめえは」

大輔は無言だ。ただただ、相手の目を見据えている。が、男も場数は踏んでいるのだろう。実戦という名前の、自分たちの本物の命を掛けたバカげた争いの場だけは。

「ここまでしてあの女どもを逃がして、あんたに何の得がある？ 裏に何かいるのか、それとも金か。海外資本ならあんたの腕に考えられねえくらいの金を回す余裕はあるだろう」

どれでもないと言ったら？

大輔の顔には珍しく笑顔の一つも浮かんではいなかった。いつもならばそれこそ、人を食ったような小バカにした薄笑いを貼り付けているはずなのに。

「なんだ…と…」

「すみませんねえ。おれはただの宅配屋のバイトなんで。頼まれた荷物運んでるだけだったつうのに、早合点したお方ばつかが、ぶんぶんぶんぶんうるせえのなんのって」

「女つつう荷物の運び屋か」

「だからー、おれが運んでるのはただの…」

最後まで言わせてはもらえなかった。

怒りにあかせて相手がセイフティーを外す音が聞こえた瞬間、大輔の身体は無意識に反応していたのだ。

沈み込んで銃口をかわすと下から両手でヤツの手首を掴む。立ち上がりざま捻り、満身の力を込めてさらに絞り込む。相手も負けじと大輔の手を振り払おうとする。言葉もないまま、お互いの全身は拮抗した力に硬直する。

相手の目を睨むことも忘れない。決して弱い相手じゃない。噛みしめる奥歯に重みがかかる。

気を抜くな、他に気を取られるな。有事の際はおのれの技能と精神力がすべてなのだ。そう教えられ続けてきた。

入隊したときからの憧れだった防衛隊空挺方面特科第四班…俗称、日本のグリーン・ベレー。転属が決まったとき、いくら大輔だとして嬉しくないはずがなかった。

制服組なら誰だって自分の力を存分に試したいと思うだろう。幹部自衛官がどこか胸の中で総司令を指すのであれば、現場の者は一度は特殊部隊に属したいと願うに違いない。

過酷な訓練と有事の最前線。わかっけていてもなお、その場に立ちたい。

結果……おれは一般人を手に掛けた。無抵抗な若い女性を死に至らしめた。それが有事か。

ふっと大輔の頭に一瞬の空白。相手の男が見逃すはずもない。押さえ付けていた大輔の手から逃れ、トリガーに指を掛ける。

はっとした大輔は、素早く無造作にそれをもぎ取ると、逆に両手でしっかりと銃を握りしめた。

右手は親指の根元と他の第二関節部分でグリップの両端を押さえる。左手は固定させるようにかぶせる。短銃は片手撃ちが基本の防衛隊であっても、空挺隊員は違う。防御のためではなく敵を確実にしとめるための技能なのだから。

もはや大輔には感情が消えていた。

一秒以下の間で淡々とその作業をこなす様に、相手の男は思わずへたり込んだ。その顔面めがけて銃口を向ける。殺意すらない。すべての動作はオートマチック。

「先輩!!」

背後から叫び声がかかるのと、聞き慣れたサイレンが間近でうなりを上げるのはほとんど同時だった。

我に返った大輔は、自分の手の中に収まっている銃に目をやる。

おれは今…何を……。

地面に座り込んだ男に、今や威厳のいの字もない。そいつの顔に腹立ち紛れに銃を投げつけ、大輔はトラックへと駆け戻った。

あの声は、おれをしつこく先輩と呼び続けるのは…朝田美羽子。三十分経ったらそのまま走り去れと言ってあったのに。お節介バカ女。てめえのせいでこっちの命は、真正正銘いくつあっても足りやしねえよ!!

自身の指紋がべったりとついた銃を、さあてチーフの堂本はどうやって所轄に弁明することやら。おれの知ったことか。

「自分が運転しますから早く乗ってください!」

「ざけんな!! 女子どもはすっこんでろ!!」

シフトレバーに手まで掛けていた美羽子を恫喝して助手席に追い戻すと、大輔は流れるように制御装置類を操ってアルミバンを急発進させた。

目指すは入国管理局、振り切るのは所轄のパトカーだ。

さっきまでの複雑な思いをすべて忘れ去るうと、彼はアクセルペダルを踏み続けた。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009 - 2011 keik
itagawa All Rights Reserved

10

10

午前中の配達を終え、大輔と美羽子は思い思いの弁当を広げていた。路肩に止めたアルミバンから降り、歩道の低いコンクリートブロックに腰掛ける。

大輔のそれはコンビニで買った二つの幕の内。それをかつこむように口に放り込んでゆく。自前の弁当箱のふたに手をかけた美羽子の動きが止まる。

「先輩、いつもコンビニのお弁当で栄養がかたよりませんか」

「…大きなお世話。てめえみてえにちまちまと料理してるほど暇じゃないんでね」

実際は、夜中まで不法入国者の移送を手伝わせてるのだ。美羽子の方も寝る時間があるのかどうか。宅配便の仕事は朝早く、いつたいいつ手弁当など作る暇があるというのだろう。だが、大輔はわざとプライベートな話を一切避けるようにしていた。バディ解消が望めないのであれば、仕事と割り切って感情的な関わりを持たなければいい。

休憩時間は全く口を利くまいとしている大輔に、美羽子の方も普段は余計な言葉をかけることはしなかった。

…こいつはただシフトが一緒というだけのバイト仲間だ。負の感情すら持たない方が良い…

そう思っているつもりだというのに、大輔の言葉の端々には美羽子へのイヤミが混じる。避けることと無関心でいることはどうやら違うらしい。拒絶したい関わりたくない、という思いがすでに彼女の存在を十分意識していることになる。

おれが手をかけて殺した朝田苑子の従妹を騙る女。わざわざ苦労して空挺に入ったというのに、それほど復讐したかったのか、久住大輔に近づくためにチエリー運送へともぐり込んできた。朝田美羽子。おそらく事情はよく知りながらもバイトと警視庁組織犯罪対策室の仕事まで組ませようとする上層部。何もかもが大輔には気に入らない。

あいつらはおれに何をさせたくてこんなまねを。

上司である堂本警視はめったに表情を変えない。いくら訊き出そうと苦心したところで大輔のような組織の末端に何一つ悟られるへまなどしないだろう。試すだけ無駄だ。

「一つの弁当をカラにし次を開けようとする大輔へ、珍しく美羽子は問いかけた。

「自炊は全然しないんですか先輩は。あ、すみません。勝手に一人暮らしだと決めつけてしまっ

失言だと思ったのか、彼女の方も口をつぐみ、箸を動かし始める。大輔の感情が少しばかり爆発する。

だからこいつはイヤなんだ。淡々としたおれの日常に波風を立てようとすることから。

「何ですかそのイヤミな言い方は。あつたまくんなあ、てめえはいちいち。どうせ一人もんだよ！弁当を作ってくれる彼女もいませんしね！それも、嫁さんでもいたらいで。先輩も幸せな生活を送ってられるんですね。だとかなんとか、オニのようなイヤミを連発するつもりだろうが！」

自分は別にそんなつもりじゃ……。美羽子が口ごもる。もっと強く言い返されると覚悟していた大輔の方が、逆に気抜けする。

「……ずっと一人だよ。メシなんざ作る気も暇もねえし、外で食った方が安上がりだし」

ぼそつと呟く。くたくたになるまで身体を酷使し、部屋には寝に帰るだけ。その方が何も考えなくて済む。

「あんたの方こそ、それだけ手の込んだ弁当作れるなら食い意地の張った男くらい引っかけられるんじゃないかねえの？」

さっさと結婚でもして目の前から消えてくれ。言外の気持ちが伝わるかどうか。憎まれるのは仕方がない。恨み辛みをぶつけられるのも覚悟はできている。けれど人間の気持ちなど現金なもので、本人自身が幸せならば日常を優先するようになるだろう。憎しみを持ち続けて人は生きられるものじゃない。上官の命令に従っただけとは言え、大輔が一般人を殺めた事実が消えることはない。どうしようもない罪悪感を抱えて生きるのはおれ一人で十分だ。

ここに居る美羽子が本物である確証はない。警視庁か防衛隊が何らかの意図を持って大輔に接触させている可能性だってなくはないのだ。しかし、彼にとってはそれすらもどうでもいいことだ。ただ、もし本物の従妹であるならば、第一発見者として駆け寄った女性がこいつであるのなら、これ以上関わらせたくはなかった。あれが単なる連絡ミスなどの事故であるはずがないから。大きな何かが動いているのだとしたら、もう不幸な犠牲者の近縁まで巻き込みたくはない。

美羽子は、大輔の言葉に一瞬ためらいを見せた。言うか言うまいか逡巡している様子が伺える。

「んだよ！言いたいことがあるならばつきり言えよ！」

沈黙にたまりかねた大輔が叫ぶ。大通りの騒音でそれはあっさりとかき消されてしまうけれど、彼女には届いたのだろう。当てこすりという風でもなく口を開く。

「自分が作ってるんじゃないです。これ、のこちゃんのお母さんが一人っ子の自分には幼い頃から母がいないので、のこちゃんとは三姉妹みたいに育ったから。今でも本当の娘みたいにしてくれてるんです」

結局その話か。へえそうですか、とスルーしかけた大輔は、三姉妹？と思わず声を上げてしまった。

「のこちゃんにはお姉さんがいたんです。聞いてませんでしたか」

いた。過去形の言葉が小さなトゲとなって危険信号を発している。これ以上聞くな、久住大輔。こいつの語る物語が真実とは限らない。必死に自分へと言いつけさせる。

けれど無情にも美羽子は続ける。思い出話を懐かしがるかのように。

「のこちゃんのお姉さん、範子って言うんですけど、みんな『りこちゃん』って呼んでて」

あとになって資料で見させられた朝田苑子は、やわらかそうな巻き髪を栗色に染めたワンプリース姿の可愛らしい女性だった。ここにいる美羽子だと顔立ちは少女らしさを残している。もう一人の女…似ているのだろうか。

「三姉妹に体育会系が一人混じってたってか。てめえくらいだろ、身体鍛えて戦争ごっこなんざしようと企んだのは」

口の中にできた傷をわざと舌でつつくかのように、治りかけのかさぶたを剥がすかのように、大輔の方から事件へと触れる。

実際、どう考えても結びつかなかったのだ。苑子とサバイバルゲームのオフ会という言葉が。

そもそもサバイバルゲームは日本発祥の一種のスポーツだ。ただその原型はアメリカで既に行われていたペイントボールと言われる。そちらはプロの選手もいるほどでトーナメント方式の公式試合も開かれている。

単なる戦争ごっこではなく、安全とされるペイントマーカー（模擬銃）を用いた戦略的な組織戦だ。サバゲーと呼ばれる名は日本独自であり、BB弾使用のエアガンを使ったものは英語圏では通常エア

ソフトと呼ばれる。

防衛隊でも軍事教練に組み込まれることがあるほどだ。もっとも空挺では行われてはいなかったので、大輔自身がこれらのスポーツに触れたことはない。

彼ら空挺の訓練は、より具体的実戦的なものであり、自己申告で弾が当たったからと敵が自ら戦場から立ち去ってくれる都合の良いゲームなどしている余裕はなかった。

複雑な感情の入り交じった大輔のセリフに、美羽子は寂しげな笑みを浮かべた。

「サバゲーのチームに入っていたのは、りこちゃんだけです。自分は学生時代ずっとソフトボールやってたから体力に自信はあるつもりですけど、りこちゃんものこちゃんも身体なんて鍛えてなかったですよ」

スノボとかテニスとか、そんな感覚でした。迷彩服を着るのもコスプレみたいだっただけだし。

美羽子の声が遠のく。どういふこと…だ。何なんだ、このどうしようもなく気持ちの悪い違和感は。

「なんて言ったらいいんだろう。もっと軽いノリなんです。自分も知らなかったんですけど、本当はかなり体力を使うスポーツらしいですよ。でもりこちゃんのチームは全然そうじゃなかった。新しく手に入れたエアガンを自慢しあって、レアものの軍用コスチュ

ームを見せ合って、じゃあ遊ぼうかって感じで」

遊び。ああそうさ、あの表情はそうだろうよ。身のこなしも隙だらけの女の子。だのにおれは無意識に銃口を向け、何一つためらうことなく引き金を引いた。

いつもの癖で自分自身を責め立てようとする大輔に、違和感から生じた疑問がわき起こり続ける。

「じゃあなぜ、あの日…よりによってホンマもんの演習場になんぞもぐり込んだんだ」

「予定していた場所が急にキャンセルされてしまったんです。けっこうプレー場所を確保するのも大変らしくて。それで人気のあるあの森に変更しようということになって」

無許可でか。どうしても大輔の方が詰問調になってしまふ。アラームは鳴りっぱなしだ。この問題には触れてはならない。このまま黙って会話を打ち切れ！

だが、大輔の思いとは逆に、美羽子は穏やかに話を続けた。責めるニュアンスは含まれていない。避けるように結界を張り続けているいつもの大輔とも違う。それはなぜなのか。

知りたかったのかもしれない、彼にしても。あの事件は解明されないことが多すぎるまま何もなかったことにされた。公の発表すらなかった。オフ会の最中に突然死、というのが関係者に話された唯一の説明だ。

「サバゲーをやっていると、迷彩服姿の集団がいるからって通報されることもあるそうです。住民からは嫌がられるから許可なんかなかなか下りないって言われました。あの森は市街地から少し離れているから、こっそりオフ会で使うチームが多いらしくて」

偶然か。偶然なのか。吸い寄せられるように、本物の防衛隊一個小隊が訓練をしているさなかに迷い込んだ素人集団。そいつらは丁寧迷彩服を着込み、別のルートからは一つの情報がもたらされ。

では、某国の作業員らはどこへ行った？本当に存在したのか。

「朝田：苑子の姉は。姉ってヤツはどうしてるんだ？」

訊かなければ知らなければなかったことだ。引き返すなら今しかない。弁当を口に運ぶための箸は止まったまま。食欲などとうに消え失せている。次の配達時間までにはまだ間がある。ここから立ち去ってどこかで暇を潰してくればいい。関わるな、訊き出すな。おれはただの歯車の一つで十分だ！

「りこちゃんは今自ら命を絶ちました。自分がオフ会に誘わなければこんなことにならなかったのにつて」

大輔は両手を組み、堅く目をつむる。組んだ手がどんどん冷たくなっていくのがわかる。身体すべての末端から凍り付いていくかのように。頭の芯まで冷え切っているというのに言葉だけが止まらない。

「三姉妹って言われるほど仲の良いあんたらを、二人もおれが殺したって訳か。そりゃ憎みたくもなるだろうよ」

見えるはずもないのに、美羽子の視線を痛いほど感じる。胸中は図り知ることはできないが。それほど…彼女の言葉は乾いていたから。

「のこちゃんのお母さんの心も壊れて、しばらくは泣くこともできないほどでした。人数が足りないからって気軽に誘われただけなのに、どうしてこんなことになったのか。納得がいかなかった。あの場にいた自分がどうして生き残っているのか、それもわからなかった。悔しかった。国民を守ってくれるはずの防衛隊にどうして殺されなきゃならなかったのか」

身を寄り添うように生きてきた女たちの平凡な生活を、おれがこの手で壊した。すべて変えてしまった。

「それであんたは…おれをどうしたい。殺すか？そんなことで気が晴れるならそうしてくれ」

事件にはならないように堂本に頼んでおくよ。おれの方だってもみ消されたんだ、フェアに行かないとな。

心のどこかで常にあつた思いが吹き出してくる。早く終わりにしてくれと。その引導を渡してもらうために美羽子が遣わされたのだとしたら、これこそが防衛隊と堂本からの慈悲なのかもしれない。

沈黙が続く。やっぱり耐えきれずに目を開けた大輔に、美羽子は真っ直ぐ顔を向ける。

「のこちゃんが誰に殺されたのか、その人をきちんと見たいと思っただんです。名前も顔もわからない防衛隊員じゃなくて、その人本人を知りたかったんです。事故なのか事件なのか全然わからない。で

も、その人がどんな顔で何を思っただろうか。どうして知りたかったのか。どうしても知りたかった」

知っただろうか。だったら防衛隊に乗り込んでいって騒げば済む話だろうが。何でおれの後を追って空挺なんかだ。

「誰も教えてなんかくれませんでした。自分は！私は…本当は何があったのか、のこちゃんは どうして死ななきゃならなかったのか、それがわかるまでは私は生きていなくちゃって思ったんです。何をしても真実を知りたかったから」

大輔は空を仰いでため息をついた。

「で？おれは今の話を全部真に受けて飲みこめってことなのか？」

自分は嘘など言っていないません！美和子の声が大きくなる。

「じゃあ、真実ってヤツをあんたが知ったら、朝田姉妹は生き返るとでも言うんか？」

美和子の話を信じていない訳じゃない。ただ、ヒールならヒールらしく悪役に徹しておきたかった。彼女がためらうことなくおれを殺せるように。

けれども、美羽子は寂しげな表情を浮かべるだけだった。それはどこか痛ましげに大輔を見やるかのよう。

「直接のこちゃんに手をかけたのは久住先輩です。だから、確かに自分はこのこちゃんよりこちゃんの分、先輩を憎んでいることは事実です。でも先輩だって何も知らないのでしょうか？知らされないまま、

人を殺させられて罪悪感にとらわれてこんな生活を続けさせられて。久住先輩はそれでいいんですか？」

だからおれはこいつが嫌いだ。おれは…そのままがいいと思っているのに。

わざとらしく袖をめくり腕時計を確かめる。もう一つため息、それはとても重く重くやるせないほど重く。

「さてと、配達開始だ。午後一指定は数が多いからな。要領よく回らねえとクレームのあらしだぞ。ほら、とつと乗った乗った」

「先輩！！」

あとは美和子が何を言おうと、大輔は一切応えずにいた。どれだけ重い話をそれぞれが背中にしよっていようが、宅配便の伝票がある限り、荷台に積まれた荷物を待ち望む人たちは確実にいるのだから。いつものひょうひょうとした久住大輔に戻れ。

だが、そのコマンドを発揮できるほどの処理能力は今の大輔にはなかった。奥歯をぎりりと噛みしめると、彼はもう一度目を閉じた。

(つづく)

北川圭 Copyright? 2009 - 2012 keik
itagawa All Rights Reserved

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9401p/>

トランスファー 【transfer】

2012年1月4日01時47分発行